

一にあらす、遼人は其の故道に因りて、漕運を通す、遼の運河は紫金泚水なれば、平虜渠則ち今の遼寧河なり、金元は海運を用ひ、河運は遼の舊に因るもの、如し、永平府志に、海路河に通ずる、三道を叙する、明確なり、元は會通河初めて開くも、岸狭く水淺く、重を運搬する能はず、歲數十萬石に過ぎず、故に元の世を終るまで、海運罷まず、其海に並ひ河に通ずる者、三岔河より三道あり、一は直沽より白河を経て通州に至り、一は娘々宮より運糧河を経て、薊州に至り、一は芦台より黑洋河、鹽河口、清河を経て、灤州に至ると、

是を以て之を觀れば、漕運は但に白河北漕の水を通ずるのみならず、横に灤水と相交通し、饋運相接せしものなり、古の所謂新河なるものは、今の新河にあらず、樂亭縣志に、新河は縣西三十里に在り、清灤の間に夾まり、雍奴(今武清)より海に達し、灤水に會する者、則ち是なり、此渠の廢するより、東餉遂に海道に由り、風帆浪泊、時日定まるなきに至る、明清の新河なるものは、其名を襲して、其故道にあらざるなり、

一九 漕運史上の花

在昔より漕運の道幾變遷し、河渠の通廢歴代是れあり、魏武の泉州渠、姜師度の平虜

渠、隋の永濟渠、遼元の海運となり、殊に隋の運河は、支那大陸の經濟上に一大影響を及ぼし、元の海運は、沿岸海上に偉大なる勢力を振ひ、共に史上に光彩を煥發せり、此の名譽ある華は、果して何處にか實を結へる、江南の稻花波の如く、積粟山の如き、豐饒の郷より、何百萬石の糧は、平原荒野の白河上に雲集し來り、燕趙の勁兵を養ふて、雄霸を稱し、隋は百萬勇兵、舳舻相銜んで、涿郡に集まり、高麗征伐の舉となり、元は兵を東海に輝かして、我國に蒞む、一敗猶餘威を海上に保てり、史上に痕跡を止むるの大なる丈、漕運の實利に依頼する愈々大なり、漕運の命脈なる、本源は白河なり、直隸の五運河悉く白河に歸一せざるなきなり、古に於ても、今に於ても、白河は漕運の本家たりしなり、其他は分家たり、支流たり、明代の頗る河運に重きを置き、亦海運を顧みざるなり、遂に灤河と白河とは、全く其關係を絶つに至り、益々白河獨り其美利を恣にするに至れり、

二〇 蘆 台

蘆台は、甯河縣の東南、北漕口の上流に在り、瀛沽塘車より、東北行山海關に向ひ、北漕韓沽を過くれは、北に蘆台の市街を望む、兵營十餘營あり、遙かに天津と犄角の勢を

爲し、北漕口の後殿として、北漕河沿の雄鎮なり、古の蘆台軍府の在地にして、五代時劉守光之を置き、俗に將臺と曰ふ、爾來常に駐兵の地たり、土地は北漕附近の如く、泥滓水、如の郷にあらず、高隆にして田隴遠く開け、鹽田近く連り、魚蛤の利、交通の便多く、市街も亦繁盛なり。

二一 蘆台運河

光緒四年、李鴻章が、唐山の炭坑を開掘するに當り、運搬の不便を慮り、唐山より胥各庄までの鐵道を架設し、胥各庄より更に漕坊を過ぎ、蘆台に至り、北漕河に通するまでの小運河を開鑿するの必要を感じ、五年間に其工事を竣功し、甲乙丙三等の船、各百五十艘、小蒸汽船八艘を新造して、唐山の煤を運搬するの便を謀れり、其新開の小運河の長サ七十餘浬あり、今石炭の運搬は、鐵道の便に因るも、猶幾分か石炭は、胥各庄より運河、蘆台に向ふあり。

蘆台以北鐵道は、此運河に沿ひ平蕪なる曠野、一條の白帯を拖けるか如く、河岸の草を踏んで舟を牽ける支那人三四人、靜かに秋色を弄する趣きは、遙かに雲烟の間に彷彿として、北方の山影を望む、景致と相應照して一幅の好壽景也。

二二 唐山

蘆台より火車は西北し、二時ならずして、童山三峯の近く登ゆるを見る可し、是れ有名なる唐山にして、周廻數里あり、複嶺重岡、其東は陡河の滎帯して流るゝなり、泉數十道あり、之に注ぐ、相傳ふ、後唐の李嗣源、會々兵を此に屯し、石城を立つる二百餘丈、基址尙ほ在り、又後唐、姜將軍蛟を斬りて功あり、此に葬る、後人廟を建て、之を祠る唐を以て名くる、實に此に由ると謂ふ、山に小洞あり、石色微黒、硯材に充つ可し、山の南坡に高大なる烟突の聳ゆるあるは、唐山の炭坑にして、光緒四年、直隸總督、李鴻章、稟奏して、創辦を准され、商局員候補道、唐樞廷を招き、八月開工し、翌年資本を招集する百二十萬、石炭採掘の準備成り、唐山より、豊潤縣の胥各庄までの二十浬の鐵道成り、更に胥各庄より、甯河縣、芦臺までの運河を鑿し、運煤船を製造する等、運搬の道備り、八年、石岩を掘出するより以來、漸々旺盛に赴き、其後津海道、周馥、唐廷樞と協力事を處するに及んで、津活鐵道の通するあり、其發達著しく、吳熾昌、張翼等之を經營するに及んで、今日の盛大を見るに至れり。

二三 開平

唐山の東北に在り、明の中屯衛なり、洪武中に真定府に調し、永樂元年滌の義豊里に移置し、成化二年巡撫閻焦、總兵委永平通判段璣等、土城に易ふるに、甌を以てし、東西南三門を爲し、各樓あり、環り九千二百二十步、高二丈三尺ありしか、今や城圯れて遺址のみ存す、然れども豊潤、滌州、平野を其西南一面に俯し、其地方一般の富を吸収し、關内鐵道の便は、能く西に天津を連ね、東山海關を越へて、牛莊に通し、北は口外地方に通ずる陸路あり、東南の路は稻地鎮の饒地に達し、四通の地自から商業の發達を來し、五十日毎に大市を開き、二十七日毎に小集し、財物豊饒、商賈繁盛、能く此地方一般の司配者たり、昔て道光以前は、口外の雜糧を運輸し、此地に來りて、滌河沿の食物の缺乏を補充したるより、一層の繁盛を來したり、其後口外の糧は、滌河の水運に依頼して、滌州に陸上せられ、難する事となりたるも、唐山の炭坑、林西の炭坑等工業の盛なるより、開平の繁盛は前に優るあるも劣る事なし。

二四 榛子鎮

榛子鎮は、開平の北方に在り、滌州を西北に去る九十清里、遼東の巨鎮、北京よりの滿州に通ずるの街路に當り、東西の門を三重に設け、市肆民屋環列し、商業亦盛なり、此地

は羅家嶺を負ひて、山岳繞圍し、陡河の上流なる、犍牛河は其東を流れ、形勢雄偉、金の天輔七年、滌州永安軍節度使を置き、縣を領する四鎮ある、二其一鎮は榛子鎮なり、要害の地たる、以て見る可し、明時東邊の巨鎮たり。

二五 古冶

開平の東北三十清里に古冶と云ふ市街あり、人家櫛比、其南二十清里に小丘あり、石炭を産すると多大なり、之れ林西の炭坑にして、其炭質は唐山に勝ると云ふ、林西の開鑛は唐山に後る、事約十年、周禮等か、唐山炭鑛の事務を督する時に在り、初めは唐山の産煤の繼かざるを補ふに在りしか、其後石炭の需用饒多なるより、盛に採掘し、現今は唐山と盛を競ふに至る、關内鐵路の古冶に至りて、一支を東南に生ずるは、則ち林西の炭鑛に通ずる鐵道なり。

二六 開平の煤脈

支那人開平の煤脈を記して曰く、風山より古冶に至る西よりして東し、連綿約五十清里、山脚を離るゝ里許、木山根の一道、高さ山と同じく向ひて去る、其形勢を察するに、今の山根、則ち古の山脚なり、多くは古の煤井なり、土人時に呼んで、舊桶となす、近

時開究者亦數十處風山の頂に在り、横眺すれば則ち東西山相連り、新月の如く、煤井に入り、煤層を察看すれば、均しく環拱して生ず、古冶の如きは、開平の東北に在り、其煤層東南に向ふて生ず、馬家溝は開平の正北に在り、其煤層正南に向ふて生ず、唐山は開平西南は在り、其煤層東北に向ふて生ず、三面均しく高きより而して低し」と其煤量の多き知る可きなり。

二七 灤

河（附録参照）

流車は古冶より雷庄の停車場を経て灤州の車站に着す、其東を流るゝ巨流を灤河と云ふ、灤河は、漢書の「肥如縣濡水、南入海陽」、水經注の「濡水、出禦夷鎮」と是れなり、亦漢に作る、其灤河と書するは、唐より始まり、漢地理書の顔師古音乃官反、正讀如灤、舊唐書に、薛訥由檀州出河あり、遼は烏灤河と呼ひ、元に御河とも名けたり、其源を蒙古より發し、蜿蜒二千餘里、四十餘の支流を合して、東南流し、海に入るの大河なり、

其各本支流大分の流域は、今の承德府屬に在り、塞上の一大河として、灤河流域の地か、遼金以後、少からざる關係を歴史上に止め、殊に現滿州朝勃興の際、西遼河及灤河の上流には、多大の關係を結び、伐明の軍は常に此の間道より進められ、喜峯口、北古

口、獨石口等より入りては、明朝を苦めしなり、天下統一の後、東部蒙古王入貢の道路に當り、祖宗發祥の盛京と神京の間に介在し、畿輔の藩屏として一層重要視せられ、灤河上流地方に於ける研究と設備は、非常の進歩を爲し、雍正年間、熱河の經營を爲し、康熙帝は、西遼河灤河の間、興安嶺の南に、周千三百餘清里の木蘭の獵場を設けて、秋狩講武を行ふて、蒙古各王を會し、十餘の行宮は、古北口より獵場間に設けられ、避暑山莊、周十六清里は、熱河北に建設せられて、歴代の各帝巡狩避暑に供ふる等、前代になき密接の關係を有するに至り、其研究大に進み、高宗皇帝の如きは、熱河、灤河源の研究を爲さんとし、探見隊を派して、其水源を求め、灤河濡水源考證なる文を草せられ、水經注、及元史地理志の誤謬を辨するに至れり、以て其灤河が塞外に至大の關係あるを知らん、

茲に高宗の水源考證の大要を記する、地理學上無用の業にはあらざる可し、濡水の史傳に見ゆるもの凡五、而して惟灤河の濡水源遠く流長く、其四に雄たり、水經注に云ふ所の、禦夷鎮に出づるものなり、灤河源は、獨石口外、東北百餘里、巴顏屯、固爾山、四泉湧出す、都爾本諾爾と名づく、此山は興安山正幹と爲し、山陽陰樹木茂密、他山と

異る此山中より出てたる涓流曲折伏して後見はれ西北納克里和落を経て小水あり東より之に注く又北哈丹和碩の西を經れば噶爾都思臺の水東より之に注く又曲折西北流茂罕和碩に至り三道河東より來り之に匯し河流始めて暢ふ又西北流復二水あり一は布爾噶蘇台より一は克爾克達より先後來り之に注く八十里察罕格爾烏蘭河屯を経て多倫諾爾界に入り上都店に至り又北流十餘里滄海和碩を經折て東北二百五十餘里博洛河屯を經庫爾圖巴爾噶遜河屯に至れば喀喇烏蘇東より之に注く又三十里にして上都河屯に至る之れ則ち元の開平府なり察罕爾諾北より之に注く又六十餘里都什巴延珠不克山を經察罕鄂博東に至り興安山より發する克伊細河東北より來り之に匯す河水倍暢ふ折れて東南流十八里磴口に至り額爾德尼布拉克西より之に注く又十二里大河口に至る圖爾根伊札爾河東北より來り之に匯す又南流七里河信布拉克西より之に注く又折れて西南流二里霍洛圖布拉克東より之に注く又九里海拉蘇台河西より之に注く又一里蒐集布拉克東より之れに注く又南流一里渾齊布拉克亦東より注入す又十里察罕鄂勒西より之に注く又十一里什巴爾台河東北より之に注す又折れて西復折れて南八里克魯布

拉克西より之に注く又七十里雁北灘を經て布爾噶蘇台哈丹和碩河西より之に注す又十七里半壁山を經又南大廟灣を經折て東復折れ西南五十八里頭道河西より之に注く又二里羅密塔子亦西より注す轉して東南流三十二里木廠に至り又折れて東流二十四里韭菜梁を經て又九十五里遼東を經て瓜地摩霍爾に至る阿爾善出所の湯泉南より之に注く又二十七里西屯庫爾を經奇勒小梁河北より來り之に匯す此より遂に滌河と名つく又二十七里郭家屯に至り既に直隸に入る折れて南流四十六里大對山に至り又折れて東し復折れて南屈曲行八十餘里興隆莊に至る南流五十九里五道河を經て折れて西南流四十九里張博灣に至り興州河西北より來り之に匯す折れて東流七十餘里喀喇河屯を經行宮を繞り東流伊遜河北來之に匯す東南流三十四里石門に至る又四十七里鳳凰嶺を經て固都爾呼河熱河東北より來り之に匯す水此に至りて益大折れて南流四十三里白河西より之に注く又卅三里老牛河東北より之に注す三十三里滴水崖南に至り二河東より之に注す又十里柳河西より之に注す又六里車河西より之に注す又三十二里清河東より之に注す又九十里豹河東北より之に注す折れて西流二十里滌河灘を經又南流折れて東

復折れ西揚技峪を經、又東南流二十一里潘家口に入り、折れて東し、又折れて西十里、走馬哨を經て、又二十四里激河橋に至り、激河西より注ぐ、又曲折東南流七十餘里、白布店に至り、恒河北より注す、又折れて東流十餘里煤峪口に至る、長河東北より之に注す、又七十三里平崖子を過き、清河東北より注す、折れて南流二十餘里峽口に至る、蛤螺河東より之に注す、又二十九里遷安縣西を過き、黃台山を過く、又二十三里折れて東流、三里河東より之に注す、又南流二十餘里孤竹城を經き、又三十五里合河口に至り、青龍河東北より來匯、河流此に至り、勢益々寬大、又十一里雲峯寺を繞り、又二十一里、武山西を過き、横河西より注す、又三里偏涼汀に至り、又東南流五十六里定流河を過き、又三十六里老河口に至る、又西南二十里小河崖に至り、清河西北より之に注す、又七里石家坨に至る、灤此より分支、折れて西南流、新橋口に至り、海に入る、河源より此に至る、約二千餘里、歐陽修の灤水は炭山の東北に出するとは、湖三省の通鑑、註職方圖考、方輿紀要、皆其說に従ふ、今考ふるに、獨石口外炭山なし、惟巴顏屯圖古爾山、土人黑老山と名つけ、此山陽、石色黝黑、所謂炭山、或は即ち此を指すなり、元史、河渠志の灤水出金蓮川中、は、周伯琦賦得灤河送蘇伯修詩云、清灤悠悠々北斗北、千折縈環護

邦國、直疑銀漢天上來、金蓮滿川淨如拭、蓋し灤河先に金蓮を經て、後上都に至る、伯琦灤河を詠する、兼ねて金蓮に及ぶ、殆んと河流の經る所を指して之を言ふ、元史は直ちに以て灤水出すと爲すは、誤なりと、其考證精竅なる、實地の踏査に由り、立論したるものなれば、其水經を説く頗る明晰なり、

二八 灤河の水運 (附録參照)

灤河の水運は、道光の初め梭形の小船を以て、八溝の糧を運し、灤州城に委積し、四方の不足者に糶するより、大に繁盛を來し、咸豐以後は更に下流大莊河口より海に出て、滿州の糧を運して接濟せるより、上下流俱に水運の盛を來すに至りたり、其水量遼河白河に及ばざるを以て、大なる發達を爲す能はず、殊に河口なる海岸は、暗沙多く、大船を入る能はず、東より來るものは、燈臺ある曹妃殿の北、臭水口より入り、大莊河口則ち劉家河口に達す、西出するには、白馬岡よりす、其間、魚骨岡、疔痘坨、南北蛤坨等の暗沙あり、頗る水運の發達を害す、然れども、漁船及百餘石糧船の往來に礙り無し、蟻の九曲を穿つか如く、出入す、昔灤河の水運の盛なる今日の比す可きにあらず、は史上に散見する所、元の將軍那顏か倚蓋屯糧所、今に灤州南十里倅城鎮北に遺趾

尙ほ存するを以て、元時か滌河の水運を利用したるの迹見る可し、其後滌河の水運治らず、其盛昔時に及はずと雖も、亦其水運決して侮る可からざるは、識者の認むる所なり。

二九 滌

州 (附録参照)

滌州は永平府の南三十餘清里に在り、滌河に蒞み、下流樂亭に通し、東は昌黎に界し、西は古冶開平に通し、城高三丈餘、周圍五里二百六十步、四門を設け、門樓あり、人口三万計り、東西及南北に通する大街あり、小巷縱横、商業繁華、殊に滌河の水運は上下に通し、鐵道は西東に城北を過き、交通の便多きより、貨物の集散頗る盛、此邊一帶商業の中心たり、其形勢の雄、要害の便は、滌關を表裏し、東畿司命を制するの概あり、滌河と相待ちて頗る研究す可きの價値あるものなり。

(イ) 滌州の沿革 (全上)

滌州の名は遼の天贊二年に始まり、其名は一なれども、其地は二あり、其一は遼の天贊中、盧龍山の南地を析ひて滌を置き、義豐(今滌州治、馬城、隋北平郡盧龍縣の故地、今の州南二十里、馬城堡、石城)今の開平三縣を領す、金は更に樂亭縣を置き、元の初め石

城馬城を省き、明初、義豐を省きて州に入れ、遂に樂亭を領するを止むと、此れ滌州の舊治にして、今の遼化州の沙峪の南に在り、其一は則ち今の治地にして、明の永樂元年二月、沙峪より州城を今の地に移し、國朝に至り、豐潤、玉田、樂亭、並に滌州に隸し、雍正の末、豐玉を改めて、遼化に隸し、滌州樂亭は乃ち永平府に屬せしめしなり。遼史に、石城縣在於滌州南八十里、は、則ち明史に滌州の舊治は遼化界の沙峪に在りと云ふ、舊滌州を指し、武經總要に滌州西至石城九十里、南至於海百十里、北至北平州四十里」とは、則ち今の滌州を指して云ふなり。今滌州は東山海關に至る二百二十里、西は京師に至る五百里の地にして、商の孤竹國、黃洛城の故地にして、大遼の義豐縣なり、周に幽州、春秋の山戎、肥子の國、戰國は燕に屬し、秦漢晉皆遼西郡の地、隋には北平郡、盧龍縣、唐は河北道平州に屬す、唐季より契丹踞し、滌河に浮んで、喜峯口、潘家口等の出入旺にして、遂に大に此地方一帯の繁盛を招き、今日あるを致せり、滌洲の遼、金、元、北胡に負ふ所鮮少なからざるは、史家の能く知る所なり、宜なる哉、口外との關係密接なる事。

(ロ) 滌州の形勢

山勢は蜿蜒起伏環廻して州城を包み、東は灤河の急流を縈ひ、北面は疊巒撐天を限り、一綫の道漸く永平に通じ、鐵路は西東に横行し、一川は南北の運を通じ、交通の利を見ると雖も、試に巖山の頂より一望すれば、左に金山嘴の影を望み、右には林西唐山の嶺を見、西南平野を俯瞰し、遙かに蒼海を深渺の裡に認む、其形勢の雄なる、幽燕の野を呑むの概あり、

一七八

其要害を以てすれば、東山海の雄關を聯ね、秦王島の防を固ふし、北永平遼化を結ぶ、あらんか、南百二三十里を離る、海岸は、遠沙暗礁にして、到底上陸するの難事たる天險を有し、若し西雷庄より畿甸に兵を放たんか、破竹の勢あらん、退ひて守を爲さんか、十萬の兵と雖も、亦容易に灤州を窺ひ、東畿を震撼する難けん、狡なる哉、契丹灤河上流より關に入りて、永平灤州に據り、其根據を固め、進んで雲燕を攫取する策を講ず、明成祖亦智慮絶群、其兵を擧げて北京に據り、通薊を略定し、居庸懷來を攻破するや、先づ眼を東方に轉し、灤河一帶形勢の地を攻取するに非ざれば、以て燕都の本を講ずる難しとなし、建文の將李景隆、既に南河間に迫まるあるも、猶ほ北伐を議して、景隆を誘ひ師を還して之を扼するの策に出で、適、遼東の兵、永平を攻むるに會

し、盛祖、馳せ救ふて遼兵を逐ひ、遂に劉家口より徑ちに大寧に赴き、之を襲破し、松亭關を降し、寧王を誘執し、盡く大寧の諸戍卒を擁して南す、勢益盛なり、李景隆方さに芦溝橋を渡り、北京城を攻む、成祖は北より整軍して來り、一擧景隆を敗り、德州に走らしむ、成祖の雄略遠識あるに非ざるよりは、敵既に京南に迫まるも、敢て惶惑の態なく、能く灤河上下游の形勢を案んし、重を茲に置きて北伐を計畫するの餘裕あらんや、此遠望ある固より必勝、其大業をなす亦宜なりと雖も、万一にして失敗するあらんか、又退ひて灤州の形勢に據り、恢復を圖るの望なきにあらず、以て成祖の識略を觀る可く、灤州永平の形勢如何を卜するに足らん乎、

(ハ) 灤州の商業

灤州の盛衰は灤河に依りて左右せらるゝもの多し、遼金元歷代灤河地方を開發するあり、明徐貞明、畿輔に水利を興す時、灤州の屬亦大に墾田の利源を開き、西は沙河東は灤河の沿岸、最も沃壤と稱せらる、明末清初は農業の盛なるを以て、灤州の發達を來し、殷富の村舍相隣るに至れりと雖も、天變地異の推移は、灤州發達の根源を一變するの不得已に至れり、

一七九

初清朝の滿州より起るや、西蒙古の諸藩を降して之を藩籬となし、親愛する事薄からず、蓋し明の口外三衛を還すの失敗に鑑みて、大に重きを塞外の經營に置き、多倫諾爾熱河に宏大の喇嘛廟を建設し、熱河には避暑山莊を築き、禁苑を設け、都統の官員を置き、承德府に昇せ、平泉、建昌、朝陽、灤平、豐寧、赤峯の諸縣を統へしむ、其地内蒙古の地と犬牙錯出して、人口蕃殖最も盛にして土地の開墾、山林の亂伐等、悉く未發の地利を盡すに餘念なきの極、鬱鬱たる深林化して平野となり、荒蕪の地は禾田となり、山多く兀けて澤潤るゝは勢の趨く所なり、灤河の上流は斯る勢を以て開發せらる、此上流の變化は、逼ひて下流に及ぶ、一大降雨の至る毎に河水の氾濫は年を遷ふて烈しく、河其故道を改め、兩岸の良田侵食せらるゝもの夥し、蓋し上流の山林亂伐か、下流氾濫の因たるは、三年五年尙は能く之を實驗するを得るに、灤河の如き二百餘年上游山林平野の開拓を爲せる積弊の由來久し、豈に下流盛漲横溢するを怪まらん、境内の各鎮庫、嘉慶年間の舊志に見ゆるもの猶ほ三十餘鎮、今且つ二十に滿たず、其餘は名を没するに至る、光緒九年夏水横溢の時、馬城迤東沃壤數十里變して平沙となる、居民昔殷富なるもの今は多く凋落し、産穀以て居民の食するに足らず、供給

を他省に仰かざる可からざるに至る、於是灤州は一變して農業の衰態を來し、商業を以て市街繁盛を維持せんとするの傾向を來す、道光以後、此地方一帯の生産する食物の缺乏するより、口外の雜糧を輸入して之を補ひ、盛に平泉州八溝地方より灤河の水運に依りて運給し、灤州城内に委積し、四境の不足者に糶す、咸豐年後より大莊河の民船は關東の糧を海より運して接濟す、此上下流より來る穀物は、皆此地に陸上げせられて、販賣せらるゝを以て行商坐買俱に穀店を最盛となす、其他此地方工業の盛ならざるより、一般日用の雜貨等も、天津牛莊各港より仰き、此邊一帯に散布するを以て此種の商業亦盛なり、

灤州史に曰く、灤州の俗、賈の本地に在るもの十の二三、關東に赴くもの十の六七なり、瀋陽、吉林、黑龍江三省の北皆至り、遠賈と雖も、必ず歸り外に流寓するもの鮮し、每歲資を獲て家口を贖はず、是れ商賈を以て農の不足を補ふなりと、以て其行商盛なる見る可し、此行商は灤州の商業と重大なる關係を有し、盛に勢力を擴張つゝあり、生産力の少き地方にして商業の盛を來すの理なしと雖も、灤州の如きは、灤河上流の永平、遷安より、口外の物産衆多にして、購賣力の盛なる地方を有するを以て、梭船

の便以て上下水運を通し、商業の發達を爲しつゝあるなり、益々之れか交通の發達を圖らば、濼州は商業貿易地として隆盛に赴くは勿論なり。

一八二

(二) 偏涼亭

濼州城北數清里に横山あり、其麓は濼州停車場の在る所にして、偏涼亭と曰ふ、人家在る三四十戸、皆旅館を以て業となす、是れ濼州の碼頭にして、下樂亭に通し、上永平に溯る、客の宿泊する所にして、貨物山堆せり、今は英の印度兵及我歩兵の駐屯せるあり、偏涼亭は嘗て聖祖及高宗の駐驛せられたる所にして、有名なる風光明媚の地なり、横山の北麓、河に沿ふて逶迤たる徑路を北すれば、行宮の在る所に至る、宮下の危崖削立し、岩下水湍激し、崖上は道を通し、其上は宮殿あり、宮後は奇岩怪石、屋を壓して墜ちんとす、其山其水の風致ある、北清に稀に見る所、研山虎踞、濼水龍翔、偏涼亭、開、横井浮烟等、濼州の名勝觀る可きもの多し。

(ホ) 濼州風俗

山に近きたるものは、仁水に近きものは、智、天津の如きは、多水の區故に、民智に過きて、姦諂、北京の如きは、山多し、故に、民仁に及はすして、迂謏、濼州は、山水の間に居り、冲

和の氣を乘る、故に、貌多樸野、文飾を修めず、其性は、勁悍、其語は、慇直に近く、毎に、紆廻少く、其行は、圭稜ありて、廉耻を矜き、節義を尙ふ、而も、勤儉能く、其業に服するの風あり、此郷古伯夷叔齊を生む亦、怪むに足らず、蓋し、山海關地方亦、頗る、其俗を一にす、支那各地方概して、早婚の風あり、殊に、濼州の如きは、男女喜んで、襁褓にして、婚を論す、矜慎なるもの、乃必す、諸痘の後を俟つも、未だ十歳を過き、婚を論せざるもの、あらず、貧窶の小家は、男女の成立を俟ちて、始めて、相訂婚するも、只十の一二、あらず、故に、土俗に、媒妁を司るもの、なし。

其家屋も、開平以東は、京津間と異り、頗る、滿州に類似し、茅を覆へ、瓦を覆ふ外、灰土を以て、瓦に代ふ、而も、其屋頂を平にす、之を、土平房と謂ふ、城市に居るものは、瓦房に住すれども、其他多くは、土平房に住す、均しく、塙あり、籬あり、院落あり、猪圈、牛棚あり、錯落安置す。

三〇 山海關

山海關は、古の臨渝縣の地にして、秦燕を併せて、遼西郡を置く、縣十四あり、臨渝縣は、茲に始まる、晋は、厭龍郡に屬し、隋の大業十年初めて、北平郡を置く、長城あり、關官あり、

一八三

り、一に臨滄關あり唐の武后更に石城縣を名づけ臨滄關あり、一に臨關と名づけ、太海關あり、碣石山あり、温昌鎮あり、五代之れに仍り、宋石城を以て名を臨關と賜ひ、遼は遷民縣と爲し、金は廢して鎮となし、元は其舊に因り、明の大祖洪武十四年山海關を創建して衛を設く、山海關の名茲に始まる、明一統志に榆關は撫寧縣東二十里に在り、洪武の初、魏國公徐達始めて徙りて東舊關を去る六十里、之を山海關と云ふ、蓋し今の臨榆縣は古冶の東に移りしなり、現朝は明制に由り、關を設け、乾隆二年臨榆縣を置く、

城高四丈一尺、厚二丈、周廻八百三十七步、土築にして、輒其外を包み、四門あり、東西南各樓あり、北門は廢す、樓高三丈二層を爲す、東門上層に額あり、天下第一關と曰ふ、相傳ふ、明の蕭顯か書なりと、城を繞りて池を爲す、深さ三丈五尺、廣十丈、外は夾池をなし、深廣之に半し、濬水四時竭きす、四門各橋を設け、往來を通す、奎光樓は城東西隅に在り、鐘鼓樓は城の中央に在り、東西共に羅城あり、

東羅城は大城東外に傳し、高二丈三尺、厚丈有四寸、周五百四十七丈、門あり、一城東則關門なり、西羅城の制亦同し、

人口二萬餘、東は東三省に通する要衝にして、近年秦王島の築港成り、西は津京に通するの便あるを以て、商業繁盛なり、且つ畿輔の咽喉要害の區なるを以て、重兵を屯して此を守り、山海副都統、山永協標ありて、邊疆を固むるあり、駐兵地として國防上必須の地となす、

(イ) 山海關の形勢

山海の雄關は、直隸の東省に踞し、畿輔の北垣を爲せる山岳の走りて海に墜り、狹隘地將さに盡きんとする要衝に鎮して、北は角山屹然として聳ひ、後は岐山高峯遠く崇地を限り、東南は近く蒼海漂渺天際を極め、西神京より撫甯に入りて來る、道路は重岡復嶺の險あり、東遼東より來る、道は一綫纒かに通し、大兵俄かに來襲する能はず、徑路甯遠邊外より山後に出てんとすれば、巍然たる長城蜿蜒西より來り、山勢に従ふて山海關を繞りて南折海に傳するあり、九門口、黃土嶺、大毛山、義院口の防あり、遼海に浮んで襲撃せんか、海岸の砲台無數並列し、秦王島の深澳之を扼す可し、若し西南海岸に傳はりて、昌黎より進まんか、留守營の東方より、山脈蟠亘南走して、金山嘴となり、其進路を阻するあり、北戴河、湯河、近くは石河の榮廻するあり、山海を攻む

る蓋し容易の業にあらず、真に天下第一の關と云ふ可し、然りと雖も、山海關は海より攻むれば之を守る堅く、遙かに勃海の口を鎖し、旅順の防を固ふし、威海衛の備を完ふせしめずんば、重を天下に爲す能はず、今英國は秦王島の海港を經營して之れに蟠踞す、優に山關海の生命を制するに餘りあり、於是直隸省東關の鍵は他人の手中に落つと云ふ可し、而して燕と遼とは連絡を中斷せられたるものなり、吾獨遼州の形勢か、幾東に重きを爲す所以を論ずるは、山海の天險既に重きを爲すに足らざるはなり、山海關既に恃むに足らずんば、何に據りて幽燕の東藩を固めん、濼州の險に據り、北永平を連ね、東昌黎を結び、下樂亭を取するを得て、後始めて、山海關の險手を下して、燕に向ふの餘地なけん、山海の險や險なりと雖も、勃海の口を壅くにあらずれば、恃むに足らず、敵艦既に勃海に浮ぶ、如何に海防を嚴にするあるも、灤河の後援あるにあらずんば、山海の形勢甚た危し矣、山海關の險と稱せらるゝは、勃海と灤河の藩屏たるあればなり、明末吳三桂の大兵を擁し、山海に駐し、李自成の漢河を渡りて進むや、清に降りて援を請ふ、蓋し勢窮するあればなり、山海關の天下に援なく、孤立して守る可からざる如此、今旅順大連は奪はれ、威海衛を失ひ、秦王島竊まれ

清國人猶山海關の險要を説くは迂なり疑なり、

(ロ) 臨榆縣の物産

臨榆は山水の奥區地、狹民稀、瘠确の郷、農業地にあらず、商賈の區にあらず、山海の險に依り、古來より駐兵の鎮として名あり、一たひ其地圖を繙かば、何寒、何峪、何口、何汎等の名多く、人をして何となく、陣營地の感を惹起せしむと雖も、東三省に通する要衝にして、商賈貨物の必經する所、税關の設けあり、貨物雲集、人口蕃衍す、従つて地の利を開くに至り、物産亦少しとなさず、蓋し天の富を分配する山に、吝なれば水に饒、原少なければ林多く、自から均一を保たしむるもの、如し、誰か言ふ、山海關地方物類稀少なりと、山あり、海あり、川あり、田あり、原あり、産する所亦衆多なり、殊に山は無限の富を藏す、石炭は最も有望なる富源にして、石門塞、義院口等に産す、石嶺、黑山は其最なり、其利の厚きを以て人之を争ふと雖も、其採掘法の進歩せざる爲、其量甚た多きに至らざるも、漸次發達す可きは言を待たず、
鐵は石門塞に産し、壁を垂る白土粉、染坊の用ゆる紅土、畫工の用ゆる赭石等、石門の産なり、殊に石灰は其産最多し、

木材は隨處の山皆松あり山遠きは材を産す石門以北の山異材多く楡椿紫楡苦
臘木報馬子黒桐榲等堅韌なる材木を産するも民一時の利を逐ふて山林の休養を
知らず樹を切り根を掘りて炭を燒くに至りしを以て山木愈々窮するに至れり、
海産は鹽務の白鹽秦天島の海魚其大宗なり、

農産は民間の常食たる粟俗に小米と曰ふもの多く豆亦少からず黃白黒青等諸種
あり脂麻蕎麥麥類ありと雖も贏餘を糶するに至らず、
鹽に薪炭を駄し石門塞より陸續として來るあり石河湯河の沿黃草に群羊を牧す
るあり貨車に毛皮の山堆せる等亦山海關の物産を語るものなり、

(ハ) 臨榆の特産 波羅木と桑樹

餅は俗に波羅木ガッコウと名つく山海關の特産にして長城外山中亦少からず余角山に登
りて之を見るに我國人の所謂カシハにして俗間五月節句に新葉を摘み餅を包み
カシハ餅と謂ふ之れなり其實は楡の如く小にして其葉大ク七八寸霜を經れば葉
紅なり支那の俗初夏土人嫩葉を採り粉黍を包み餅を作る其名を風香餅と曰ふ味
甚た佳なり蓋し我俗のカシハ餅の類なり餅は五泉菴及び裏外峪石門諸山に最も

多く産す其葉は山蠶を飼ひ繭絲を作るを得

元來遂に桑樹なかりしか慕容廆種を江南に求め始めて之を得今陞邑は桑頗る少
からず亦養蠶をなすものあり此地方の養蠶は頗る研究す可きものなり殊に山蠶
に至りては大に注目す可き價値あり山蠶は繭葉にて養ふ

(ニ) 山海關の壯觀

山海關に遊んで角山寺と二郎廟に遊はされは以て山海の風光を語るに足らず角
山は山海關の北方に聳ゆる峻峯にして麓より頂に達する一時間餘を費す山頂寺
あり俗に角山寺と曰ふ寺に道士三四人住す寺前は林を爲す檜紫楡報馬子葉松等
木質堅韌なる樹多しと雖も山多くは岩角草屑寺後を繞りて長城の壁に登り俯瞰
すれば山海の孤城脚下に落ち城に傳して蜿蜒として山勢に従ふて來る長城は尙
ほ山頂を越ひて谷を下り更に後山の頂を過ぎて群峰亂山の間に隠見し北天を畫
七西北の溪は石河の流にして河崖に松林緑を罩め水は山を繞りて平野に出て帶
の如く南流海に入る溥滄たる碧海は西南より金山嘴秦王島を浮出して近く感り
て東北に延き一望萬里遙かに金州の半島に對す其景の雄渾壯麗なる海風飄々と

して人袂を吹き、凜然長嘯、天地の大なるを覺ゆ、長城の偉大なる紀念を目睹しては、北胡と中國と歴代關涉の迹を想起し、近く明末の史を追憶して感慨措く能はざらしむ。

之を寺僧に聞くと、角山寺、雲霧聚散時ならず、或は半山間は大雨にして、其上は清明、別に一天あるか如し、陸開泰か詩に、

寺拓岩扉古堞邊、蒼松蔚々薛蘿牽、雲沈野樹潭光冷、霧斂遙峰月色妍、千古溪山長不改、一朝晴雨却頻遷、憑軒盡日看無厭、纔識盤中別一天、

と能く其景を説き、氣品清逸なり、山頂より曉日を海中に俯すれば、其出てんとする紅雲四擁恍として蓮坐の如く、日升れば則ち座沈む、其景致美妙絶好、角山寺は棲賢寺と曰ひ、觀音大士殿あり、其東廂は明の蕭順か讀書の處にして、西院に角山精舎あり、明の詹尙書榮か讀書をなせし所、晚年遊讎の地となし、今改めて關帝殿となす、東巖の經畲別墅は郷人講學の所なり、

(ホ) 山海關の仙境

二郎廟は角山の西方、首山の頂に在り、高角山に及はず、岩層にして樹なく、石河は北

より來りて西脚を洗ひ、南に白帯を拖き、委蛇として山海關城の南を過ぎて海に入る、兩岸は平蕪の荒野、人烟稀疎、陸盡きて海は近く、城南に迫り、一碧萬頃、水天と連る、顧みれば、北山横列、天を摩す、其望亦開濶、雄大、山海以西の郊野、歴々見る可し、廟後に至れば、老松數株、岩罅より長生し、危岩峭立、怪石相接し、毘草髮の如く、苔花毛の如く、之れに貼す、直下千丈、則ち石河の水、對岸の山は屹然頭を壓して、崎ちて東に走り、角山の側面と相睨む所は、河の北來して一轉、彎曲する隘にして、崖には老樹蒼鬱、谷間に繁り、斷崖巨岩と相反、視し、深溪は皆白沙玉堆、碧藍の水、曲折し、急湍聲を激し、奔湧來りて、岩角を噛み、匂々、踵々、黙して之を聽けば、或は雷聲の如く、或は驟雨の如く、或は波濤の如く、山嶺に和して、天樂を奏す、緩急清濁、調和の美妙、耳聰に神爽かならしむ、俯して、溪下を觀れば、水石に觸れて、龍跳し、岩に碎けて、玉散し、瀟して、淵となれば、洄漩、螺旋を爲し、清素たる水色、奇拔雄雋なる山態、人目をして、明かに心清からしむ、其幽邃深奥、清逸奇峭の趣、神仙の郷の如し、

(ハ) 臨渝の風景

角山の登臨、二郎廟の景致の觀る可きのみならず、臨渝の風景、去りて探る可きもの

多し、海岸の澄海樓は、乾隆帝の駐驛せし所、風景の美、吟咏せらるゝもの多し、秦王島の海歌を盛夏に聞き、金山嘴の風帆を春に眺め、美女墳の飛雁は秋に翔るあり、茶盤高冠諸山の四時陰崖に積雪を止め、蟠桃峪常に雲を停むるあり、滄關の十四景、石門塞の八景等、皆臨滄の景色の北清に絶群なるを説くものなり。

(ト) 山海關の風俗

山水の氣に訓化せられたる山海の民情は如何、吾は頗る我國の民風に近似するを觀る、詹榮か論に、山川所限、風氣必鎖、漸而清之者、人多負氣、任俠、慷慨、激壯、猶席易水之遺烈、士習、詩書、談氣、節、少所讓、可、農、耕、工、募、獲、甘、受、苦、分、省、約、工、乏、良、計、とは山海の民俗を洞觀せるものなり、邊鎮屯衛の舊を承け、人情激烈を以て高より、平居角抵武技を習ひ、文禮に疎にして、活潑、勇悍にして、廉耻心に富み、京津の俗と異り、大に慷慨、任俠者の流多く、近く馬某の如き、其一證なり、臨滄縣志の人物傳を歴觀せば、大に其然る人物の多きを見出さん、時に由りて文武盛衰を一にせず、人に由りて職を異にすと雖も、其天稟たる民人の性格、風習には甚たしき相違なきもの、如し、蓋し教育文化の發達如何に由りて、何分か之れを美化し、卑下するも、遂に變化する能はざる山

海關人氣質風習のありて存す、愛す可きは山海關の民風なり、

(十) 關 政

古の之を關するは暴を禦する爲なり、内外を限りて固封する所以譏して征せざる者なり、山海關は、山海に據り、神京を供衛し、東は三省に通し、遠く朝鮮に接し、洵に畿輔の咽喉、兩都の鎖鑰なり、邊疆商旅、國を下り、球を共にす、往來出入、雲集波駛す、能く奸民の跡を漏し、之を壟斷して或は登る者なきを保せず、故に嚴に盤詰商賈を征す、亦以て國謀を重んじ、法守を昭かにすと云ふ、鎮守山海關副都統、關務を總理し、兩翼の協領は交代稽查す、佐領、防尉、驍騎校等官は交班して日值す、山永協標中軍都司、結城守營把總と協同して盤詰す、

凡商民の關を出つるものは、情を具し臨滄縣に呈出し、票を受け、票に本人姓名籍貫、年貌及び某事を以て某處に至るとを註明し、並に記簿して縣に保存す、商民關に至れば、票を官に呈し、疑なくは乃ち出す、其入關する者は、該地方官旅行券を検して關に入らしむ、

關禁は、東珠、人蔘、貂皮を私販し、又偷んで關を過ぐるもの、罪は、刑部に送り、貨物は

副都統より内務府に送り、載貨の車馬拏獲は官兵に賞給し、私販違禁等の犯罪は臨滄縣に渡して審問し、律を正し、貨物は官に入れ、載貨の車馬は審問して、關情を知るに係わるものと備者とは官没し、情を知らざるものは原主に給還す。

三一 萬里長城

長城は燕に始まり、歴代之を築きたる一にあらす。史記に燕長城を築き、遼陽より襄平に至り、上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡を置き、以て胡を拒く。秦の始皇蒙恬をして長城を築かしめ、臨洮より起りて遼東に至る、萬餘里、正義に括地志を引き、長城は岷山西十二里より起り、東遼水に入ると。齊顯祖天保六年、民百八十萬を發し、長城を築き、幽州夏口より恒州に至る、九百餘里、七年、西河總、秦の成より長城を築ひて東海に至る、後主の天統元年、庫堆成より東海を距る、山に隨ふて屈曲二千餘里、山を斬り城を築き、成遷を置立する五十餘所。周の宣帝の大象元年、山東の諸民を發し、長城を修築し、亭障を立て、西雁門より東碣石に至る。

隋文帝開皇六年二月、丁男十萬を發し、長城を修築し、七年二月、丁男十萬を發し、長城

を修築す。

長城の史に見ゆる者此の如し、今の入長城と云へば、必ず秦始皇の時築くと曰ふは非なり、是其北邊に在る者のみを指して之を言ふも、清國古來長城多く、但に北邊に在るものゝみにあらす、顧炎武、詳に日知錄に辨して曰く、

「春秋之世、田有封漁、故隨地可以設關、而阡陌之間、一縱一橫、亦非戎車之利也、觀國佐之對晉人、則可知矣、至於戰國、井田始廢、而車變爲騎、於是寇鈔易、而防守難、不得已而有長城之築。」

と、築城の原因を叙し、更に史を引き、齊に長城あり、魏に長城あり、韓の長城あり、楚の長城あり、趙中山亦長城ありと云ふ、長城の一始皇帝に成らす、一國に成らす、一時に築かれしにあらざる明白なり。

山海關の長城は、現存する北邊長城の東端なれども、昔燕秦築く所にあらす、晋大康地理志に長城は樂浪の碣石山に起ると、通典に薊州北廢長城築に至る二百三十五里と云ふを以て、今の山海附近の長城か古長城にあらざる知る可し、故に山海志に舊長城は關の東北に在り、西北に延長す、是れ秦將蒙恬の築く所なりと、

今山海關は、則ち徐魏國公の築く所、明史洪武十四年、徐達、燕山等衛屯兵萬五千百人、を發し、永平界嶺等三十二關を修む、宏治中、蒯濤、巡撫、洪鐘、邊牆を築ひて、山海より居庸に抵り、凡そ二百七十餘處、隆慶中、軍門譚綸、請ふて、敵台三千を築き、居庸より東山海に距ると、今山海關の長城は、則ち明時の築く所たる明白なり。

三二 古長城說

現に存する長城の外、蒙古の地に古の長城ありとて、高宗純皇帝、古長城說を作る、茲に其全文を録して、考古家の參考に供すへし。
木關自東至西、延袤數百里中、橫亘若城塹之狀、依山連谷、每四五十里、輒有斤墩、屯戍、舊蹟、問之蒙古及索倫、皆云、此古長城也、東始黑龍江、西至于瀚沙、類然、夫蒙古、恬起、隴洮、而屬之遼東者、今其城猶存、乃去此數百里而南、且東西又不若是其遠也、則古長城者、豈循、燕、疏、佐、時、所、爲、者、耶、山海、括、地、所、未、載、于、無、意、中、得、之、荒、畧、口、傳、而、借、余、以、垂、其、名、豈、非、造、物、者、之、靈、跡、久、晦、而、必、彰、耶、嘗、若、較、籍、傳、記、浮、夸、多、僞、固、不、若、茲、蒙、無、文、者、世、代、相、沿、指、實、以、道、之、無、褒、貶、于、秦、于、其、間、也、則、秦、之、所、築、爲、曠、邊、乎、爲、障、地、乎、于、古、無、聞、而、今、傳、焉、吾、安、知、天下之似此未傳者、當復幾何乎、又安知今經予傳而必保其後此之不、又失傳乎、或曰、此

非城也、蓋天地自然生、此所以限南北也、夫天地既生、此以限南北、則秦之爲長城、蓋可笑矣。

第四集

一 北清の風景

勃海の航行中、山光鳥影、青松白沙の灣、翠目の風景、我國近海の如き、明媚の態あるな
く、燕郊、趙野の遊、山村、水郭、花笑、鳥鳴、翠黛の遠山は、麥圃、青一望の上に、綺ち、淡
霞の如く、煙林、盡くる所、春水、洋洋、流れて、夢の如し、白帆、野外に、飛び、雲雀、天に、啼り、景
致、歩々に、轉じ、半日の行程、海を、觀、山を、望み、平野を、俯し、川を、渡り、奇岩、佳木、芳草、百花
の、觀を、盡し、旅客をして、沿途の、天然か、如何に、絶佳なるかを、嘆せしむるある、我國の
如きの、絶好、絶美ありや、吾人は、北清の、天然が、海に於て、陸に於て、將た、山に、河に於て、
我國の、多變化、多趣味の、絶好なる、風景を見出す、能はざるなり、落莫たる、天地、如何に
北清人は、憐れむ可きかよ、

勃海の水や怒るとも、狂濤、山を、翻し、地を、掀するの、偉觀を、呈する、能はず、其、海岸は、煙
台、秦王島、金州、半島の、觀海、内海の、景を、發揮すと、雖も、一も、浩々、蕩々たる、大洋の、面目
を、觀る、能はず、畿輔の、地、平野、渺茫、矚目、天際を、極め、數日、行ひて、山を見ず、林、峻亦、得難

く、人煙稀少、只河水兼波の間を流れ、紆曲折の如き、之れが爲に少しく其景色の佳好を添ひざるにあらざるも、其單獨にして變化なき、滹沱より北京に向ひし鐵道旅客の能く惱殺せられて知る所なり、京漢鐵道に由りて正定に向ふも、西に太行山脈の蜿蜒たるあり、山或は遠く、或は近く、山態の變なきにあらざるも、大體に於ては眼は同一なる平坂の景に接するあるのみを如何せん、比格的、眼を悦ばすに足る、關内線に搭して、滹沱より山海關に向はんか、胥各庄まで水滸の郷、平蕪の地、唐山の炭礦よりは山近く、丘陵多く、綠樹の間、白壁の人家點在し、遠山近峰、窓外に轉じ、滹沱上風景畫の如く、偏涼亭邊、奇石磊落たり、石門より昌黎の山態一變し、荀立廟、倒北、滹沱邊の秋色更に愛す可く、滹沱登臨、北清一の偉觀となすあるのみ。

西苑御河橋上、太液地の波光萬壽山下、昆明湖畔、柳煙眠れるが如き、其明媚なる畫景、蘆溝橋の曉月、天高く、月色皎として、西山の蒼翠を照す、白河下流、兩岸平行、蘆荻露白く、海風孤舟を吹き、秋月千里を照す、其清爽なる高致、羅喉嶺上、幽燕を俯瞰し、角山頭、山海の城を蹈んで、勃海を望む、其雄大なる觀、人間をして絶大の感を起さしむ、居庸、古北の險關、薊州盤山の懷古と遊覽に興多き、薊州風景の奇峭秀矯なる、保定鷄頭水

邊春雨の洒灑たる、金山嘴の夏塞外の冬、北清の天然の至美と至好の粹を鑑めたるものにあらざるか。

北清の風景には、花木の佳麗濃艶を缺き、水流に於て、玲瓏透徹、清鑑鏡の如き美なく、惟り山海關、石河の水あるのみ、其他は、滹沱なる黃濁色のみ、山岳には、翠松杉檜の常盤木繁れるなく、大概皆、兀山裸身なり、林丘阜、陵亦少く、總てに於て、彩色の極めて少なき繪畫なり、吾國人の北清に遊ぶものは、其風景の寂寥たる失望するは、萬人同感なり。

風景の單調、吾人の眼光をして不愉快を感ぜしむるのみならず、水蒸氣の稀少にして、空氣の乾燥せる土地なれば、降雨降雪至て少く、土地疎鬆、殆んど三百六十五日、所開蒙古風なる、朔北の強風吹き到らざる日は稀にして、風起れば、必ず塵埃を飛ばし、濛々人目を障さる、甚たしきは、塵烟雲の如く、天色爲に黃を呈して、晝猶は暗きとあり、而も風は一種の臭氣を含んで、鼻を打つ、其不愉快なる想像の外なり。

北清人一般の嗜好と趣味は、滔々として墮落し來り、更に天然の風景を愛するの感念なく、毫も花色月影を樂むの感念なく、雅量なく、亦山紫水明の佳郷を尋ねるが爲

に一日半日をたの旅行たも敢てせず居常人我の利慾に屑々し看花看月の興を行
るの餘裕なく郊外の柳緑青を繰るも敢て人の春色を訪ふものなく一二詩客の占
有となし彼等の多くは天然の繼子として荒寥たる寂しき生活を送り天然と相關
せざるものゝ如し。

嗚呼天然の風景を樂み天の美なる色彩ある文を觀天の美なる聲詞ある音樂を聞
かすんは如何に人の心は清く高く美なるとも次第に卑下汚穢して其思想感情を
擧げて泥土にす北清人今日の墮落一は天然の風景が人に感化教訓慰安娛樂を興
ふるの缺如たる大に興りて力ありと云はざる可からず。

二 北清第一の美園

北清の風景落莫たる到底我國明媚なる天然に接觸して生活しつゝある人種の耐
ふる所にあらず北京西山の景は幽邃なる閑雅なる雄麗なる之れあるも河海の水
を缺く保定真定一帶山あり水あり山に奇抜なる水に優美なるありと雖も湖海の
觀なし天津は多水の郷湖海河流の觀あるも山色をたも望む可からず平野茫茫變
化なく平淡輕妙の致あるのみ瀋州は山あり川あり山に樹あり水に風帆の浮ぶあ

り山水配置の妙明媚なる風致前者と撰を異にするも尙ほ瀋水の黃濁なるあり獨
り山海關に至りては山は奇岩能く樹木を長し河水は清澈鑑む可く海の大長城の
雄島影波光天然の美として備わらざるなく殆んど我國の風光に似て北清第一の
美園と云ふも誣にあらざる可し。

三 北清の天候（風と塵）

北清の天候は極寒と極暑の二氣候殆んど一年を占領して温暖なる春秋は極めて
短時間なり而して裘衣より直ちに葛服を着換ゆるか如くに急變せり曇天雨天は
極めて稀にして唯勃海灣に面せる海岸は稍々内地よりも雨量多く其他は殆んど
早に苦めり而も風と塵とは北方支那の名物なり冬は勿論激烈なれども春となく
秋となく吹き息む事は稀其反對に降雨は去年の秋八月より本年の春四月まで雨
降らすなどの事實は珍らしからず土地の乾燥せる爲朔風一到すれば浮塵飛んで
煙の如く滿都を包み萬丈の黃雲天を蔽ひ砂土は室内に襲來し机上に堆積する事
夥し風の日は俄かに塵の北京となり雨の日は化して滿泥濘の北京となる雨後三
日風息んで塵飛はず邊雲遠く天清きに及んては惡臭の北京と化す北清代表の北

京既に然り、其他の地方亦然り、到底北方支那には風と塵とを除く能はず、昨年夏期なりき、蒙古襲來の風は、二日間吹き絶へず、黃塵日を蔽ふて、晝暗く街頭の人家皆燈花を點するに至る、恰も公使館附武官青木中佐の送別會の當日、吾等二人は人車を馳りて、餘園なる會場に赴かんとする途次、此光景を睹て、奇異の思を爲し、時針を檢すれば、午後二時を過くるのみ、俄然雷光一閃、迅雷轟き、天地の寂寥を破る、や、驟雨忽ちに到り、衣袴を濕す、其雨痕を檢すれば、黃濁泥の如し、餘園門前に抵り、友人の服を見れば、泥痕斑々、フロックコートに印す、雨後庭前の木葉皆泥色に化す、於是皆其泥雨の下りたるを知る、蓋し空中に飛散浮遊せる塵埃雨と化して下り、泥雨となりしなり、世界中泥雨の下る地方、北京を措て他にありや否、以て其風力の強烈なると、塵埃の多量なるを知るに足らん、

四 直隸の風俗

予は畿輔一面の民俗土風を歴觀するに、四大別するを得、滹河系に屬する東直隸、太行系に屬する西直隸、燕山系に屬する北直隸と、白河口系に屬する南直隸なり、假りに四大區分の中心點を尋くれば、北は北京南は天津、西は保定東は永平府となす、而

して北京天津は相近く、永平と保定は相似て、稍々異なる點あり、北京の人寛厚樸茂、禮を重んじ、柔順にして活氣なく、何となく惰氣を覺ゆ、天津の俗は、輕浮私利を重んじ、惰慢にして、且つ生を輕んじて、善争するの傾あり、永平山海關邊は、民雄悍にして、禮義を重んじ、勤儉にして、利に淡なり、保定の俗、亦勤勉素外、慷慨情に激し、易く、氣節を以て相磨脚するの風あり、民は農桑を務めて、活氣滿々、加之、天津の客氣と、山海關の俠氣、北京の惰氣とを去りて、質實重厚にして、大に自重の志あり、蓋し保定の俗は、直隸最高美となす、山海地方之に次て、津京の俗は、最も卑下なり、

(此章明治卅五年九月日本人より轉載す)

五 北清の樹木

其土地は疎鬆、其氣候は寒熱の隔絶せる甚たしきを以て、其樹木草花の我國と異なるものあるは言を待たず、其最も多きは楊柳なり、海岸附近鹽鹼の地は、平衍沮洳一望皆不毛、數里にして、青草氈の如く、漸くにして、楊柳の樹を見、之れより桃李あり、槐あり、北京には槐樹最も多く、頗る之を國樹として、貴ぶの風あり、榆棗椿、之れに次ぎ、松柏椴檜の翠色は、寺觀社祠に植へられ、修篁は之を見る能はず、西太行山脈及山

西の山中、松柏、檜、樅、楡、栗、胡桃、桃、樹を産し、此邊の燕山脈より遼東、滿州に接するまでの諸山、木質堅韌の樹多く、黃松、檜、樅、楡、樺、杉、檉、柏、梓等の樹繁り、永平、府東の黒桐、楡、山海關邊外山中の報馬子、紫楡、苦楡、木、山東省の桐は皆有用の材なり、興安山及五台山には落葉松多く、塞外には臘樹、六道木、夜亮木、明開夜合等の奇樹あり、概して之を云へば、都市には我國の如く梅、櫻、桃李の花木なく、庭前の老槐、蔭を爲し、野には楊柳の多きを見る、山皆兀けて樹木稀、深山幽谷には松柏、杉、檜の建築材たる樹木あるのみ、極めて山林樹木の利少なし、故に近古以來、建築用の材木は之を南方に仰き、近くは東三省地方より其需用を供給しつゝあるなり、薪炭用の木材も従つて缺乏しつゝあるを以て多くは石炭を使用し、薪の用は極めて少なし、故に北清人が日々使用しつゝある石炭の量は、非常に多額なるものなり。

六 北清山林考 其一

山西の五台山、或は西山の潭柘、接待兩寺の山、老樹鬱蒼たり、滎州及山海關の山、老松は矯々、岩角を穿ちて躍れり、塞外の山尙ほ鬱として蒼々たるもの少からず、予は始め北清の山悉く兀けて、樹木を生せず、岩山磊塊、毫も蒼潤の氣なきを見て、天然の相

違、我國の山の如く蒼翠滴たるか如き景致と異る、別に怪むに足らずとなす、然るに或は西山に遊び、或は盤山、以東の山を觀るに及んで、始めて疑ふ、燕山大行、固と兀たる裸山にあらざる可し、其變は翠黛、其皮膚は潤澤なるなきかと。

古來燕山大行の山、皆鬱蒼として繁りしにあらざるかの疑問、一度吾が胸中に湧くくより、山林盡きて骨肉露出するの原因少からざるを見出して、愈々北清が森林たりし昔ありしかを追想して止まず、蓋し人事の變亦天然の變を類推す可ければ也。

北清山林考 其二

人文の河沿に繁殖して平野を開拓するや、其繁殖力は漸次上流に向ふて開伸せられ、游牧より土地開墾の農業となり、土着の民人に依りて、山林樹木の伐採は行われ、天の利源は人間の力に由りて總ての方面に開發せらるゝ者也、天の利生々已ますと雖も、亦人の力を以て養はずんば、時に或は盡くるあり、故に嘗て孟軻、衆庶之を知らず、其弊勝て言ふ可からざるを觀破し、經濟の病を論じて、斧斤時を以て山林に入らば材木勝て用ゆ可からずと、山林休養の道を説く、然れども庶民庸愚、近利に走りて、隘隘を爲さず、山林亂伐の弊は、極まれり、遂に休養の道を知らず、茲に赭山を見る、

支那北方は南方に比して發達の速なるに反して氣候寒烈にして樹木の發育は遅
 遅たる上、造林の道は講せられずして伐採は盛に行わる、年代の久しきに從ふて樹
 林凋萎甚たし、之れ其今日の童山骨岳を見るの一因なり、
 民山林休養の法を知らず、藉山日に多く、樹根新藥を生し、春芽山に縁なるに及んで、
 北清の地養牧の盛なる、無數の畜類は山中に放養せらるゝを以て、羊群馬牛騾驢の
 青草を牧し、新芽を嚼む、蓋し造林に害を與ふる決して淺少にあらず、是れ其一因な
 り、
 山間の民、其林衰ふて其産式微なり、故に其足るを外に求め、或は樹を伐りて其根を
 掘り炭となし、其土を開墾して田圃となすものあり、山家石田の發達は山林衰落を
 意味す、是れ其一因なり、
 叙上の諸因は、現に滿州及塞外等の未だ充分に發達せざる地方にて實見するを得
 るの證例にして、老なる松杉樺檜は、樹々自から磨擦して發火し、遂に山火事起す
 か如きも亦山林衰態の一原因たるに相違なし、余は此の諸原因か今日の北清の兀
 山を生み出せしにあらざるかと推察す、

北清山林考 其三

果して然らば古北清の森林たりしの實證ありや、余は不幸にして、周く諸書に就ひ
 て之を調査し、之れか證據の多くを説く能はざるを遺憾となす、唯二三の紀事に依
 りて想像するに過ぎず、例へば隋の煬帝の高麗を征せんとするに當り、百萬の船艦
 は永濟渠に浮んで、涿郡に集る、其河道明かならざるも、通鑑に、諸軍凡百十三萬三千
 八百人號二百萬、其醜運者倍之、宜社於南桑乾水上、類上帝於臨朔宮南、祭馬祖於薊城
 北、帝親授節度、朔三省の註に、薊城南桑乾は即今の芦溝橋下の水とあるを以て察す
 るに、桑乾河に由りしもの、如し、今日の水量を以てして、果して百萬舳艫相合んで
 涿郡に集まるを得しや、頗る疑ふ可しとなす、吾は隋時永濟渠より涿郡に至る舟路
 は、決して今日の永定河如き水量の少許にあらずるを信するものなり、當時桑乾の
 水か今日より多量なりしは、蓋し其發源地以下沿岸に山林の繁茂して、常に水分の
 含畜力大なりしに基因せるならん、之れ其証にあらずや、
 今や山兀け林枯れたるを以て、河水常に少しと雖も、一度大雨到れば、水量頗る増加
 膨脹す、北清の諸水流の氾濫横溢するの害、昔日に十百倍する所以、亦山林の亂伐か、

發源地に水分含畜力の缺乏を來したる反證なるなきが、殊に百餘年來、漯河の夏秋大雨毎に氾濫して、下流兩岸の饒野を侵食するの猛烈なるは、其上流塞外熱河屬の山林の伐採林政の荒廢と、原野の開墾、山田増加の甚たしき結果なるを、最も適切に説明しつゝあるを見は、益々北清の山林の繁りたるにあらすやとの疑念を深ふするにあらすや。

山西の應州に古寺の寶塔あり、其建築は數百年前の木造に屬す、其用材の多くは落葉松の類にして、其巨大なるを以て推察するに、其建築の當時附近の山中に老なる樹木の繁茂せしものならんと、某工學士の言を聞く、然り彼の五台山は落葉松の産地にして、今尙數百年の老樹、蒼々たるものあり、此邊一帶皆て老樹の山に森々たりしは疑ふ可からざるの事實ならん。

又古人の紀行文詩に見へたる、森林山脈の今は一變して、赭山となし、其面影を見る能はざるもの一二に止まらざるは、人の能く知る所なり。

且つや、其山岳丘陵の地質を檢するに、樹木の成長發育するの不適當の地味のみにあらざるを見るに及んては、予益昔日の森林時代を想像して已まざるなり。

北清山林考 其四

予嘗て天津と北京降雨の量を比較したる事あり、其距離に於ては、四十里内外に過ぎざるも、北京は西山近く、迫り水流少し、天津は白河に蒞んで海近し、地勢に於て此相違あるを以て、水蒸氣の多量たる天津の降雨は、北京よりも頗る多量なり、海湖の沿多水の區、自から雨量多きは勿論なりと雖も、降雨か山岳森林に關係するもの少からず、其山は常に樹木の蒼々たるあり、平野青草繁く、山身潤ふて原土濕ならば、降雨一下するも能く其水を含滲して、一時に悉漏せず、漸々低きに流れて河流急に膨大ならず、下流に氾濫の憂なく、上流に蒼潤蘊奥の氣ありて、水蒸氣を放散し、能く大氣を調和するあるを以て、水源枯れずして、降雨の量亦適合し、嘉穀飽登す、然るに北清の山老樹の茂大なるなく、鬱勃の氣色を飲き、森林盡きて原野墾し、童山石田相連り、平沙漠々の曠土少からず、其結果河水源の涵養を爲す能はざるより、水流常に細く、大雨一到すれば、其水一時に悉漏傾注、遂に氾濫の災を爲し、數日にして亦細流と化す、山間河底水量少きより、水蒸氣の稀薄となり、土地の乾燥となる、水田化して陸田となり、陸變して荒土となる、山林の盛衰興廢か、其土地氣候物産等に偉大なる變

二二二
化を與へ、拖ひて人間に及はす感化は鮮少ならざるを知らば、北清の研究を爲すものは山林に關しては其の跡を尋ね、其現狀を視察し、其將來の經營等、大に研究を要す。於此か余は此疑を係けて識者に質す。

附 錄

第 五 集

一 灤河の三大事業

日英同盟新に成立し、吾國民は將に此氣運に乗じて、大に清韓兩國に經營する所あらんとす。此時に當り、吾人の先づ最も注意す可きは實に事業の撰擇にあり、以下吾人が將來有望にして且つ有利なりと信ずる事業に就き、聊か所懐を述べん。吾人は灤河の三大事業を以て、吾國民の當に選擇從事す可き事業なりと信ず、三大事業とは何ぞや、曰く灤州の開市、東畿鐵道の布設及び灤河口の築港是なり。

(イ) 灤州の開港

灤河は之れ昔の滹水にして、歐陽修の所謂滹水岩山に出づと云ふものは是なり、源は直隸蒙古の山中より發し、延長二千清里渤海に注ぐ、三大河の一なり、其流域の廣大なると白河に伯仲すと雖も、深山幽谷の間を貫流して、舟楫の便少きと、治水の經營宜しきを得ずして、氾濫甚しき爲に、從來只有害なる河としてのみ目されつゝある

ものなりとす。

二二四

溧河は流行く々々幾多の水流を糾合し、山間を下りて永平に至り、水勢益々急にして、汨々然平原に奔馳する處、一市場ありて之を扼す、溧州と云ふ、吾人は先づ溧州に就て説かざる可からず。

余嘗て天津より溧州に向ひ、途上の形勢を按じたることあり、天津より蘆台に至る迄は、沮洳蘆菑の水郷なるも、進むに従ひて土地益々高く、胥客庄よりは山脈を望む可く、一帯の地味乾燥して陸田茫漠たり、唐山に至りて山漸く近く、古冶に至りて益々近し、雷庄の停車場に至れば、山脈鐵道を横断して南走し、西南の野を劃す、進んで溧州に入れば、峰巒盤回起伏し、溧河は其東に流れ、巖山南に峙ち、横山其北に聳る、其背後には群山羅列して、永平を限る、要害險阻、實に東畿一帯の咽喉を扼するの勢あるを觀察したる也。

之を軍路上より觀察するに、山海の雄關も、溧州なく永平無んば、敵を扼するに極めて薄弱なり、溧州の形勢たる防備上よりすれば、前驅たり、此前驅を利し、試に兵を雷庄より進めんか、破竹の勢を以て、幽燕の野を蹂躪せんと、蓋し難事に非ず、假令敵の

逆撃を受くることあるも、之を防ぐ亦甚た容易にして、所謂吾に南下の勢ありて敵に北犯の利なき土地なりとす。

曠日海防篇を讀み、次の如き文あるを發見し、吾觀察の誤らざるを慥かめ得たり、曰く、溧州は臨渝を控し、索に驅し、畿甸を翼蔽し、山を負ひ海に濱し、稱して形勢となす、契丹州を此に置いて、滏陽の防を厚ふし、營平を聯絡し、幽冀を窺視するや、其後拱手して燕雲を取る、女真其跡を襲ひて、而して宋室之が爲に靡爛す、嗚呼溧州を此に置くは亦中外得失の機なりと。

州城の北五清里に風光畫くが如き地あり、偏涼亭と云ふ、溧州車站の在る所にして、又溧河の淀泊所なり、其埠頭には無數の船舶輻輳し、帆檣林立せり、岸に靠りて建てられたる旅店三四十戸、四時旅客充填して、喧噪比なし、繁華なること驚く計りなりとす、之れ溧河上流下流の利害互に相疏通補足するの地點なればなり。

州城は人口三萬餘、鐵路西は津京に通じ、東は秦皇島牛莊に達し、而して陸路は東南茨榆陀に通じ、西は開平西北は榛子鎮に達し、水路北は永平遷安、東は昌黎、南は樂亭に達す、洵に水陸四通八達の要路に當り、地方數十里の貨物集散の中心點なり、將來

二二五

充分發達の望ある地點なりとす。

灤州屬の東南は水多くして西北は山多く、山に鬱勃の氣なく、水に氾濫の憂あるも、西南倚城稻地鎮の地方は土沃にして民富み、大豆麥落花生等を産する少からず、又唐山林西多量の石炭あり、梅山に白堊を出し、北方は石材に富む、殊に上流地方より來る、獸皮木材藥材紙木炭蕎麥等の貨物は、皆灤州を経て始めて牛莊煙台に輸出せらるゝものなりとす。

今灤州に於て、開港せば、從來東牛莊を經、西天津を通じて、外國に輸出されたる口外の生産物は、直に其中央なる灤河に集まるは必然の勢なり、若し灤河口の築港成り、灤河の水運開け、東鐵鐵道敷設せらるゝに至らば、其貿易の繁盛期して待つ可し、灤州商業の最も繁盛なるは穀店なり、而して其行商多くして十中の六七は、皆東三省地方に至りて營業しつゝあるは、輸出品の少くして輸入品の多額なる實證なり、以て灤州の開港が、輸出港にあらずして輸入港としての必要なるを知らん、主なる輸入品は穀類に次で綿布なり、之れ最も販路の廣きものにして、燐寸捲煙草陶器は之れに次ぎ、其他石油砂糖硝子等の日用品も銷路狭からざるべし、又雜糧輸入の盛な

るを利用して、灤河の航運を握り、更に東鐵鐵道に由りて我が商權を、遠く口外に振ふことを得、灤州は我が商民が口外に出づる唯一の閘道なり、口外の利權を以て露國の勢力圏内と認め、敢て一步も我が利權の伸長を圖らざるが如きは、吾人の斷じて取らざる所、灤州の經營は我勢力を口外に張るの端緒なり。

灤州の外交的關係は極めて薄く、日清戰爭の際、海岸劉家河地方に小部隊の防備兵を駐屯せしめし外、別に何等の關係も起さざりしが、一昨年義和團の亂は、此邊迄波動し、露軍が停車場附近を掠奪破壊し去りたる後、英國は民家を改造して兵舎と爲し、印度兵を駐屯せしむ、我國も亦駐兵して共に鐵道保護を爲せり。

灤州は古の孤竹國にして、今尙ほ其遺風あり、人民は一般に朴野慤直、勤勉儉節にして文飾を好まず、勁悍にして廉恥を重ずるの風あり、自ら天津邊の漁鹽の末利を逐ふ、儉安輕浮の俗と其の選を異にす、彼等が我國に對する感情如何と云へば、寧ろ良好と云ふて可なり、此地方滿州と益々密接の關係を有するより、日清戰爭以來、夙に我軍の武勇を耳にし、其文化を慕ふの傾向を有する折から、拳匪の亂に我軍隊が獨り號令嚴肅にして、寸毫も犯さば、能く援群の功を奏したるを聞き、且は實際其軍隊の駐

屯しつゝある規律と態度を目撃するに及んで、更に一層の感服と信用を加へたるものゝ如し。

其地味は砂を含んで膏腴恰も我が利根川沿岸の桑田に似たり、地形は高陸にして、山あり、川あり、隴畝あり、森林丘陵あり、風光又極めて明媚、北清地方稀に見る所聖祖及高宗は數々東巡して、駐蹕吟咏せられて行宮をも建てられたり、行宮の近傍は兩山相迫りて、溧河の灣流を挟み、奇岩疎立、斷崖千丈、兎斧神功の妙言ふべからず、只山身皆岩石、蘆草の被むるのみにして、樹木鬱蒼たるの靈氣に乏しと雖も、氣候は寒暖甚だしからず、頗る人の健康に適す。

之を總ぶるに、其政治上より觀察したる溧州の盛衰は、拖ひて溧州の治亂に關し、永平府と相抱ひて、東畿一帶の安危に影響を及ぼし、其軍略上よりは、山海關の強弱を左右して、雲燕の主命を制するに足り、其經濟よりすれば、北清三口よりの輸出入品は、水陸運の便を占めつゝある溧州より、直ちに吞吐し得るの利益あり。

我國が此開港經營を爲すは、一面其政治軍略上に勢力を増進すると共に、我が商權を擴張し、進んで口外の利益を占むの用意にして、一面は外交上よりする東畿一帶

に於ける列國の舉動を監視するの便を得んとするなり、特に滿州と口外とは、密接の關係を有する溧州なれば、此方面に於ける魯國の動靜は、間接ながらも最も能く洞察するを得るの便利あるなり。

溧州の開港は、如斯各方面より觀察して、我國が進んで其經營に着手す可きの必要を見るなり、此經營は、獨逸の膠州灣、露國の大連灣、英國の秦皇島等に於るが如き、重大の關係を有せり、世人徒らに余が言の大なるに過ぐるが如く感ずる勿れ、誰かに地理と歴史とを繕ひて、渤海灣の支那史上に盛衰の關係を有する如何、渤海と直隸省との關鎖が、史上に地理上に如何なる影響を及ぼせし乎、直隸と溧河との關係如何、溧河と滿州及び北直隸現在の關係等を研究せば、或は溧州の經營の將來に大望を期するの必ずしも空論にあらざるを知らん。

或は曰ん、英國が秦王島の經營に對して、其繁盛を殺ぐの感あり、英國之れに反對せんと、是れ杞憂なり、何となれば、英國の秦王島經營は、其不凍港たる點にありて、冬期の繁盛を豫測し、漸々天津牛莊の權を茲に移轉せしめんと、の希望に出でたるものにして、蓋し其勢力の横線に延長するを希望するなり、吾人は其成功を疑ふ久し、兎

に角、英國既に其成功を期する點が不凍港たるにある以上は、我國が濰州を經營し、濰河口に築港し、東畿縦貫鐵道を敷設したればとて、其凍港たるを以て其目的を沮碍するの憂なし、殊に我國の目的は商權の縱延にありて、毫も英が横延を希望するに對して礙なし、秦王島は横延の増長力を有するも、更に縱延の餘地なきものなれば、其力を西し、我は北に向ひ互に相扶けて商務を擴張するは亦友邦の義なり、英亦好んで我が經營を妨ぐるの憂なからん、予は我國の之れが經營に着意せんを望んで止まず。

(ハ) 東畿鐵道敷設

北清に最も重大なる關係を有する我國が、時世の必要上、獨占經營の上、濰州を開港せしむるも、白河遼河に比して航運の不利なる濰州水運に任し、交通機關の完全を圖らざれば、只に濰州の我が商權を擴張する能はざるのみならず、徒らに秦王島の繁盛を助長するのみ、於是か東畿鐵道施設の必要は生ずるなり、東畿鐵道なる者は、濰河本流河口を起點とし、一直線に北行、口外に走りて、平泉州に達する百餘里の直隸縦貫鐵道を云ふ、其起點は築港點ならざる可からず、假りに濰河口の甜水溝棧房

を起點として、北行して樂亭縣の東北を過き、馬城鎮より濰州に達するを敷設工事の一段となす、之れ最も費用も困難も月日も多くを要せざる四十餘里の線路なり、濰州より永平遷安を除き、濰河を渡りて三屯營に至るを二段とし、三屯營より北行、濰河店にて再び濰河を渡り、喜峰口を出て、寬城より平泉州に至るを三段となす、其里數は甚しき差なきも、其敷設の困難は二段は一段に二三倍し、三段は更に之れに二三倍の困難あるは必然なり。

此困難と經費を要する東畿鐵道は、之れ果して有望有利なるか、頗る研究を要する問題なり、予が信する所を以てすれば、東畿鐵道は決して無利益の鐵道に非ず、前途大多の希望を有せる者なり、濰河を上下する旅客の夥多なる、喜峰口、潘家口、桃林口等を出入する貨物の多量なるは、東畿鐵道が旅客貨物もなき空車の運轉にあらざるを説明して餘あり、吾人は今完全に濰河と各口の來往出入の貨物旅客の數を詳細に報する統計を有せざるを遺憾となすと雖も、決して坐上の空談にあらざる事は、普く實見家の然りとする所なりとす。

東畿鐵道は、單に濰河上下流の交通機關を完成する爲めの利益のみにあらずして、

北清に於ける我國の鐵道の一大母線として、許多の子線を生み出すの餘裕を有するものなり、此許多の支線は多大なる利益と希望を有するものにして、優に母線を養ふの力あり、母線は子線と相待ちて偉大なる勢力を有するに至り、濼州は各線の主腦となりて其の繁榮を集中し、我國商工業の勢力をして確立せるは必然の趨勢なり、試みに必用なる支線を擧ぐれば、

第一線は濼州より張家口に通ずる線にして、濼州より西北沙河鎮に至り西行豊潤三河玉田通州より昌平を経て、居庸關を出て、宣化張家口に達す、之は東鐵鐵道に次いで敷設を急にせざる可からず、且つ此線は宣化府より更に分岐して第三線たる山西鐵道を生み、大同より南下黄河に流むへし、

第二線は濼州より蒙古に通ずる鐵道にして、東鐵鐵道の寬城より、西北行熱河に到り、灤平より西北行豊寧を過ぎ、北行して多倫諾爾に達するものなり、此線は第五線を分岐して、灤平より右北口に入り、密雲より北京に通ず、之れを熱河北京間線とす、第四線は、灤州より滿州に通ずる鐵道にして、東鐵鐵道の終點、平泉州より、東北行して、建昌朝陽に達する者なり、此線は第六線を分岐す、朝陽牛莊間鐵道にして、朝陽よ

り義州に至り、東行牛莊に通し、更に朝鮮の義州に達する第七線を生ず、

以上を東鐵鐵道に結び付くる七天子線と云ふ、此許多の鐵道を敷設する決して容易の業にあらずと雖も、余は極力其有望なると、敷設の緊急を主張するものなり、我國の商工業を、天富と稱する南清及揚子江沿岸に擴張する固より急務なり、而も列國競走の多きを如何せん、湖南汽船會社の如きか起るは余最も感喜する所なりと雖も、河運の獨占は不能なり、北清の野、江南の豊饒に似すと雖も、決して我國民の想像するか如き赤土にはあらずるなり、從來世人の耳目にも觸れざりし口外の富源、熱河附近の金礦、平泉州の雜穀、建昌朝陽山中の炭礦、其他獸皮類の産出は、將來決して等閑視す可からざるなり、去れば露國人は夙に此の口外に注目し、或は礦山探見商業視察などに赴く者多く、近來は鐵道探見隊の如き者群を爲して旅行すと云ふ、然れども未だ其他の諸國にして指を染めしものあらず、英國は直隸の有望なるを觀破し夙に手を着くる處あり、今や秦王島の一角に據りて商工業の利權を擴めんとす、長城南英あり、長城北露國ありと雖も、今にして、我國が銳意直隸に滿州に、商工業の擴張を希圖せば、英露は到底敵し能はざるへし、

北清商工業の先導は鐵道なり、北清鐵道の敷設又た競走者多きを見る、現に露は佛を導ひて唐山張家口間鐵道を強求し、英國は之れに反對して、直隸等の鐵道少なくも自國に相談する位の權利ありと唱へて清國に迫り、頗る暗闘默軌の觀あるは、南清の運河事業と同じく北清の鐵道至大の利益あるを以てなり、我國既に南方航運業の必要を觀察する以上は、北方鐵道敷設の必要を覺悟せざる可からず、漫に北清の野は荒漠瘠确の郷となす勿れ、試に林文忠公の西北水利籍を繙き、馮桂芬の論を聽き、畿輔通志を閱せば、少くとも北清の野に一の希望を有するに至るは當然なり、其以上の研究を爲せば、其以上の希望を有するも、失望の憂なきは北清の野なり、列國が鐵道政畧に由りて、競ふて支那内地に鐵路の延長を謀らんと欲する時に當りて、我國敢て尺寸の鐵路を支那の土に敷設せんとする計畫あるを聞かず、頗る以て憾となす、時は至れり、英露相競ふ、我國起て清國に説き、清韓保全上、我國は直隸に二三條の鐵路を敷き、露國か滿州蒙古の疆上に於ける運動を看守し、彼の野心を擅にせざらしめんと誓ひ、露國に直隸の鐵路を敷設するは斷して不可なりと勸告し、一面は英國に説ひて、我國は鐵道を敷設するは北清に於ける日英露の三國均勢上

の必要を以てすへし、我國今にして北清に一線の鐵道たに有せずんば、何に依りて商工業の利權を握り、鑛山採掘の利を得、而して我國の勢力を張らんと欲するや、且露國か蒙古鐵道を延長して、北京を衝かんとするは、頗る支那の獨立に危險を加へる者なり、滿州より熱河に鐵道を延長せんとするの計畫既に熟せるは、將に遼の古跡を襲はんとするものなり、之れ幽燕奄有の野心を加えんと、計畫しつゝある露國に對して、我國は日英同盟の宣誓を鄭重にして、之が防備的態度を取るは當然の義務なり、漫に滿州問題の解決を以て日英同盟の成功と爲さるる以上は、凡ての方面に於て清國の安全を謀らざる可からず、我國の北清鐵道の敷設は、如此方面より觀察するも必要なるへしと信す、

兎に角、我國が灤州を開港するまでに經營する上は、如何なる事情あるも、故障あるも、困難あるも、東畿鐵道と口外鐵道は斷じて敷設せざる可からず、其他能ふ丈けの利益ある支線は之れに結び付け、灤州を主腦として、總ての計畫をなさる可からず、而して徐ろに河口築港成り、河運の盛を圖りて、遂に水陸運の中心點となさば、北清の一大港たるは疑ふ可からざるなり、

(ハ) 溧河口の築港

溧州を経營するには、其河口に築港す可きは固よりなり、然るに溧河は白河の如く其河口一ならず、數支して海に入る、曰く劉河口、清河口、胡林河口、野猪口、臭水溝口、浪窩口、南溧河口、溧本流口等あり、何れも其水量少なくして、海口は沙堆淤塞にして大同小異なり、只現に河運航路たる胡林口は、直ちに上樂亭溧州に通すと雖も、河口沙泥殊に多く、大船を容るゝは極めて不便なり、南の溧河口、則老米溝口は水量多きも、海口の沙堆比較的少なく、築港上、或は容易なるや知れずと雖も、余か觀察を以てすれば、其水勢胡林口と同じく、一直線に南下するを以て、氾濫の憂と沙堆填塞は免れざるへし、最北なる溧河口は、水量又甚た少からず、殊に河流彎曲迂廻頗る水勢を養ひ、其の海岸の沙も堆する多からず、築港も易かる可く、後日治河工事を施して支流を本流に合し、呑漏を防ぎ、河底を深ふするに至れば、水流急激の憂なく、河運大に開け盛なるへし、故に余は假りに溧河の本流口を築港點とするの便を説くものなり、築港の事たる殊に専門家をして、其河流海岸海底等を深く調査するにあらざれば、果して溧河口となす可きか否は斷言し難し、然りと雖も余は此の多くの溧河の

下流なる海口の多くの中の一か少なくとも、白河海口の船舶淀泊所位の便利は、確かに有するものと信ず、海上不穩の如き事あらんか、數時間ならずして秦王島に避くるを得るの便あり、

溧河口天然の不利は、到底英露獨の如き、完全なる築港は望む可くもあらず、其經營の重きは溧州に置き、海口は太沽洋位の船舶の設備を爲すを得ば満足なり、小船舶の上陸點として、須要なる河口の土地買収市街設計棧橋倉庫道路等の設備は完全ならしめざる可からず、築港に付ては多くの要求を爲さざる可し、

不完全ながらも船舶の淀泊するを得るに至れば、直ちに溧河には無数の小蒸汽船を浮へざるへからず、而して能ふ限りは拉船ヒキフネを爲して、上流溧州は勿論永平遷安に溯りて、旅客と貨物の運搬を計る可し、是れ溧河事業の第一着にして有利なる事業たる明白なり、

築港と河運の完全なる成功を望むは、溧河の治水事業を待たざるへからず、是れ最も緊要なる問題なれども、亦至難の事業なり、溧河が年々氾濫侵食して、良田を害するは、地方官の尤も憂慮する所にして、人民は歳々凋落貧困するの慘狀を下流に演

じつゝあり、地方官其目前を糊塗するに巧にして、一時人民の急を振濟するの小惠を行ふも、愛民の術は未だ一人の講したるものなし、故に治水の本を策する能はず、益々其の大患を醸成す、吾人は清國政府に勸告して治水衙門なる獨立役所を立て、只に黄河のみならず、清國諸川の治水工事を總括し、又永定河治水分衙、滌河治水分衙等の分衙を建てしめ、我國の造林學者、農學者、工學技師等の俊逸なる顧問を置きて、清人の防風に經歷あるもの及び其智識あるものを擢用して、治水の法を講せしむるの必要あるを見る。

馮桂芬曰く、田を治むるは水を治むるより始まると、水を治むるは源を治むるに在り、水源は山林にあり、山林治りて水治まらず、田治らざるものならず、北清山多くは兀にして岩石骨立するも、樹茂らざるにあらず、山海關に遊んで深山老樹の茂るを見る、滌州の山、北京の西山、稍々樹木の林を爲さしむる絶望と云ふ可からず、滌州に就ひて之れを云ふも、其上游の山林を繁らし、兀山は防河工事を施し、雜草を茂生せしめて其源を養ひ、下流の支流を本流に合せしめ、河府を深し、水量を多からしむれば、從ふて流沙の力強く、因て游塞氾濫の害少く、且つ堅固なる高堤を築き、樂亭の車

地に一定を鑿し、河溢すれば之れに滙流せしめ、一は灌溉の用に供し、一は之を海に漏す等の防水工事を施さば、沿岸の荒野再び膏腴の田となり、昔日の如き豊なる村落となる可し、此地方の渫水に因りて及ぼす影響は、大なるものなりと知るへし、又滌河の水量盛なれば、從つて河運の盛も、築港の完全も期す可きに至るなり、治水問題の滌河事業に關する所、淺小ならざる以て見る可しと雖も、是れ清國人の責ある事業にして、我國人の爲し能はざる事なるも、之れを清國人に慈愼し、輔翼して、實行するに至らしむるに務めざる可からず。

叙上の滌河口の築港か、未だ我國が清國に於ける勢力に偉大なる關係を有するは、略は推するを得へし、先づ水陸地の利權を握りて直隸の倉庫に入り、北は蒙古の野を衝ひて、露の南侵を塞ぎ、西山西省を直下して、黄河の險を扼して、潼關を摩し、東は朝陽を出て、畿州より遙かに首を昂げて、鴨綠江畔の義州を望み、瀋州の中腹を挟らんと擬し、南は獨の山東を俯瞰す、如此にして天下に事を爲す可き而已、露東三省に跋扈せば、我愈よ直隸の野に力を養ひ、清國を輔翼し、監督し、保全し、且つ我商工業の利權を伸長す、於是か日英同盟の宣言は明白に實行せらるゝなり、(此一篇明治卅五年六月以後日本)

二 滦河上流の富源

予嘗て日本新聞紙上にて、對露策として我國人が北清經營の緊急問題たる滦河の三大事業を論ず、其識者の一顧に假せしや否は知らざるも、余は尙ほ極力其急務たるを主張して已まず、今對露問題の嘩すしきに際し、滦河下流に於ける三大事業の利益は、其上流富源の開發にあるを以て、其富源を詳叙して、更に對露策に論及す可し、研究の順序として、滦河の水脈を説かざる可からざるも、之れは高宗の滦河水源考證に譲り、單に滦河上流の區域のみを説かん、其本流のみを以てすれば、上流は多倫諾爾、豐寧、灤平、熱河、平泉地方を經過し、下流は遼化、遷安、盧龍、灤州、樂亭の各縣に亘る、其上流の域には、二十有四の支流ありて、縱横傾注す、豐寧の小灤河、伊遜河、熱河縣の熱河、平泉の瀑河、連昌の青龍河の如きは、其重なるものなり、此無數の血管か、塞外天地の富源を涵養しつゝ、ある域を灤河の上流域と總稱す、此域の富を叙するには、殊に密接の關係を有し、利害相離る可からざる二箇の流域をも並せて説かざる可からず、之を東流する大凌河、古の靈河上流域と、西遼河、古潢河上流の東北流する二

大支流域とす、此二大流域と灤河上流域とは、慕容燕の勃興してより以來、奚契丹遼金元歴代の根據地となり、相環連毗隣し離るゝ能はざるの關係を有して、天下に重きを爲す、清朝の滿州に興りて、塞上の地を以て畿輔の藩屏となし、灤河上流域の中心點たる熱河を陸せて承德府となし、大凌河流域の朝陽縣、西遼河流域の赤峰縣をも、之れに隸屬せしむるに至りたり、如此關係の切なるものあるを以て、余は略々承德府屬、則ち直隸省の口外地を灤河上流とは指定するなり、

上古より支那中土の文化は、夙に發達し、文質彬彬たるに反して、四隣の民族は、人智蒙昧にして、野蠻の風多きを以て、東夷、西戎、南蠻、北狄等の名目ありて、之を排斥し、敢て中華の政教に浴せさせしめたり、秦漢に至りて、北方の匈奴、羯に起りて、邊疆を犯し、魏晉に涉りて、胡羯の勢盛にして、中國に侵入し、漢人を苦しむる以來、北敵は支那歴代の國患となり、支那史上、北方人種と漢人種の衝突事件を以て多く充たされつつあるは、何人も能く知る所なり、此史的教訓が常に漢人をして、輕蔑と厭惡を以て異人種に對するに至らしめたり、長城、口外の地は、直ちに被髮左衽の蒙昧野蠻の土となし、盛世の時と雖も、塞上の地は、治めざるを以て治むるの政策を取り、殆んど捨

て、顧みざるの風あり、其俗は既に野蠻其地は磽确不毛、其山谷深澁は虎豹の巢窟、其平野は青草白沙、群畜の遊ふ處とは、之れ萬人の想像を一にする所、其想像は吾人にまで波及せしと雖も、想像は事實にあらすして、塞上の地、今は事實に於て、吾人の想像を打破せり、近世の歴史は、明かに上古の史のみを以て想像せるの誤を説明せり、眞に塞上の地は、早くも一大變化を爲せるものなりしよ、

塞上の天然は變遷せるものにあらずと雖も、人事は廻轉す、其山は依然として高からざるにあらず、其谷は深からざるにあらず、虎嘯鹿鳴は之を聞かざるにあらず、群牲は野に牧せざるにあらず、風勁氣寒、霜早雪烈ならざるにあらず、然れども、天は土地の富を均一にし、取捨人の欲する所に任かす、長城外の民豈に獨り落莫貧窶の生涯を送るの理あらん、唯蒙古民、無智にして、游惰、游牧を事として、遷移定住なく、水草を逐ふて安寛、故俗に安んじ、地の利を開き、新事業を興すを知らざるより、各處に伏没せる富は、千百年の間、猶ほ荆棘の裡に藏して發せられず、漢人之を覩て、漫に言ふ、塞外無用の地、口外苦寒の郷と、迂遠なる讀書人か、漢土の文明を誇稱し、禮義空文の坐談に國事を註誤しつゝある時に、既に契丹の族は奮起して、遼河の沿に臨潢府を

建設し、頻りに埋伏せる未發の富源を開拓し、英金河土河の流を溯りて、大定府を設け、進んで、溧河上流域に漫延し、流に順ふて、口内に侵入し、盧龍溧州の險に據りて、呼號すれば、幽燕舉がる、趙宋、廢落ち、氣怏れて、内に和戰の論喧ひすしく、強兵外に感り、朝に一域を失ひ、夕に一州を奪はれ、呂中をして、「中國之險、移於夷狄、燕薊不收、則河北之地不固、河北不固、則河南不可高枕而臥也、」と論するに至らしめ、河北固からず、河南安からず、遂に宋室南渡して、微弱となる、金源、遼の後を襲ひ、元は其後に繼ぎ、溧河最上源に上郡路を設け、其東南を大軍路となし、大に其經營を重んじ、之れか發達を促したるより、遂に塞上の地は、一大變遷を來したり、明や漢人種を以て、此人種を驅逐して、元に代り、顧みて北邊の經營を敢てせず、棄て、守らず、三衛撤して、薊遼の禍は絶へず、拖ひて亡國に至り、清朝は滿州より國を興して、東蒙古を征服し、關に入りて、明に繼ぎ、特に塞上の經營に重きを置き、熱河に避暑山莊は設けられ、木蘭の遊獵、關武の禁苑は開かれ、驛路の驛次には、無數の行宮建てられ、中國人の往來頻繁となり、蒙古人よりも、智能の發達せる漢人の眼光には、塞上未發の利源は、歴々として映し、來り、進んで之れか開拓に従事する移住者は、續々輩出し、今日事實上、溧河上流の有

利有望にして、畿輔の地と密接離る可からざる關係を有するに至り、決して世人か等閑視するか如きものにあらざるを明示せり。

試に之を最近の事實に徴せんか、乾隆三年九月、上諭二道を一讀せよ、曰く「畿輔地方、今歲歉收、米價昂貴、朕深爲厪念、向來口外米穀、不令進口、留爲彼地民食之需、今年口外收成頗豐、而內地不足、所當酌量變通、以資接濟、如有出口雜糧及販運進口者、聽其往來、不必禁止、又曰「派出戶部司員赫々那爾善、內務府官員常休、王慎德、於張家口古北口二處、每處各二員、携帶內庫幣銀前往、會同地方官、將來豆雜糧等項、照時價採買、運送來京、交八旗米局平糶、使都門兵民得資外來之米、以供饗殮、而口外有餘之糧、亦不致耗費於燒鍋等項、無用之地、實屬兩有裨益」と

口外の地、產穀盈餘の時、之を糶するを得るあるを見るは、世人の意外となす所ならん、殊に永平府邊外の、青龍河、豹河沿岸、平野の如きは、道光年以來、年々其產穀を口内の開平、灤州地方に糶するの小量にあらざりし事實を以て、其地方富饒の度を卜するに足らん、東八溝より西土城子に至る一帶、皆良田なるより、山東、山西、直隸各省の民、口外に出て、耕種、食を謀るもの、甞に億萬のみならず、漢唐宋明の絶てなき所

にして、人口の蕃殖迅速なるを以て、乾隆帝は、其四十三年に、承德州を改めて府に陞す、其上諭に曰く

熱河地方、朕每歲木蘭秋獵、先期駐蹕、數十年、戶口日增、民生富庶、且農耕蕃殖、市肆殷闐、其秀民並知蒸々向化、茲誦相聞、現已興建學、議定庠額、並命設立考棚、將來人文日盛、可儼然成一大都會、而名稱仍熱河之舊、殊於體制未協、因思熱河從前、會稱承德州、嗣後改爲承德府

と以て、熱河の繁盛を察す可し、是より平泉等六縣を隸す、始め雍正年間には、熱河總管を設け、乾隆三年、改めて副都統を設け、八旗駐防の事を專轄せしか、嘉慶十五年、改めて熱河都統を設け、蒙古人漢人交關の案、及び平泉、赤峰、朝陽、建昌の稅務を總理し、道光七年、直隸總督邢彥成の奏に従ひ、熱河の民案、并熱河文武官大計、運政悉く都統に核辦せしむ、遂に熱河都統は各省總督、巡撫同一の待遇をなして、頗る權力を重大にし、塞上の施政をして、一層敏活ならしむるの結果、墾田の増加、人口の繁滋を來し、民物殷阜、宅井駢闐し、田賦既に内地に相埒しきに至る、如何に其發達の盛なるかを、見るべし。

承德府志に依りて各縣の納稅地額の數字を示すへし、

額徵旗民地徵銀表

府縣	額徵旗地	額徵民地	合計	旗地徵銀	民地徵銀	合計
承德	八五〇八五	一九九三三	二八五〇一六	三九四八六	三八四九二四	四二四四一〇
灤平	一、五三三	七三三六	一九八七九	四六三、四三	一三三、二八	一、六六六、六一
平泉	三、七〇六	四八、二〇	三、八〇八、九	三、三〇、〇三	九七、四七	四、〇〇七、五〇
豐寧	二、八七三	二、三三六、五	五、二一〇、八	三、九六六、六	五、九六六、五	九、九三三、一

外に豐寧郭家屯の稅米百〇一石八斗

灤平上流の地二萬二千八百十一項の田一萬九千九百三十二兩餘の稅金、固より多からずと雖も、之の調査は概數にして精密を極めたるものにあらず、殊に之れに建昌朝陽赤峰等を加へば、世人が窮索不毛の地とす、塞上にして、此の數字を示す、寧ろ多となす可きなり、又其人口増加の比例に至りては、更に一驚を喫す可きものなり、左の比較を一覽せよ、

乾隆四十九年と道光七年の戸口比較表△印減

府縣	乾隆戸數	道光戸數	増減	乾隆人口	道光人口	増減
熱河	八、九七九	一六、三三九	七、三六〇	四一、四九六	一一〇、一七一	六八、六七五
灤平	五、二三〇	六、九一四	一、六八四	一〇六、六三〇	一四、五七六	三九、一三九
平泉	二、九三一	二〇、四四九	△八、八六六	一五、四三〇	一五、八〇五	三七、四七
建昌	二、三三〇	三、一九九	八、二六六	九九、二九三	一六三、八七五	六四、五八二
赤峰	六、三二四	一四、九九九	八、六七五	二二、三七八	一一二、六〇四	九〇、二二六
朝陽	一、五三六	三、一七五	一、六三九	六一、二二〇	七七、四三二	一六、二一二
豐寧	二〇、八七一	二二、一九八	一、三二七	七二〇、七九	一一五、九七三	四三、八九四

道光七年以後も、亦此步調を以て増加し來りたるは疑ふ可からず、人口の増加斯く迅速なるは、土着民人の蕃滋にあらずして移住民の多き其一大原因なり、此地方土着の民少なく、蒙古の移民のみなりしか、漢人の山東直隸より移住し來るもの、山を拓き野を墾し、耕種より産を起し、衣食の計足りて、安居し儼然土着の民となり、亦其故舊を招いて、第二の故郷を作り、盛に其勢力を張り、領地を廣め、滿蒙旗人

の田地多くは漢人の或は租借或は置占する所となり、其富は悉く民人の吸收する所となり、旗人貧乏にして給を漢人に仰ぐに至りて、新來の移住者の勢力駭々として本土の蒙古人を壓迫し來る。於是劉綸の如きは、外來の民人を驅逐し、地畝の増墾を禁し、牧畜の本業を奨励して、蒙古民人保護策を上奏するに至る。康熙帝頗る意を蒙古に注ぎ、數巡幸して、教養の道を講じ、山澤水魚の利ある所には、墾田の利あるを諭し、牧畜業を勵ます等、庇護到らざるなし。特に内閣學士の黃茂等に命じて、蒙古教養の官として派遣し、懇切の上諭は時々邊疆の民に降れり、然りと雖も、蒙古人の無智にして、懶惰なる、聖主の意に協ふ能はず、寸を退き尺を退き、智力あり、忍耐力ある漢人の驅る所となる。其勢滔々、到底十百の保護者出つると雖も、如何ともす可からず。馬上に弓矢を横へ、山野の間を奔馳し、勇を戎事に争ふ、蒙古人の長する所と雖も、平和なる天地の生存競争場裡に立つて、勝敗を決するに至りては、蒙古人は到底漢人の敵にあらず。

故に康熙帝は、五十一年に、山東民人、口外に往來地を墾すもの多きは十萬餘に至る。伊等皆朕か黎庶なれば、既に口外に至り、田を種へて生活す、若し留り住するを容さ

すんは、彼等何に往かん、但互に相對照査せされは、將來俱に蒙古と化するを以て、山東等の民人、口外に至り、田を種するものは、來住還去必ず戸籍簿に記入せしむ可し。との上諭を出すに至り、漢人の塞上に永住を許す、是より蒙人漢人との生存競争の自由戦争は、一層激烈となり、東滿洲に侵入するものは、山東省より渤海灣を越へ、遼河を溯りて、其平原を開拓し、遠く松花江嫩江流域より、黒龍江岸に及び、大凌河口より入るものは、義州朝陽より、東蒙古に蟠踞し、南直隸より入るものは、遼河を溯りて、平泉建昌に漫延して、西遼河沿に進んで、遼河口より來るものと合し、白河の流に沿ふて、口外に出つるものは、遼平寧熱河に移住す、遼凌遼白の四大血管に由りて、輸送せられたる山東直隸山西の數十萬の移住者は、盛に滿州蒙古の饒野を開墾し、其富源を開發しつゝある。爾來幾十百年、滿州の如きは、今や東亞の寶庫として世人に認らるゝに至る。遼河上流域の如き未だ甚たしく、世人の注目を牽くに至らずと雖も、遼遼白の三流を溯り來りたる、從來の移住者の多きを以ても、其富源の淺からざるを知る可し。殊に遼河上流の富は、單に平原及び耕土のみならずして、寧ろ他に在りて存す。崑山深谷、森林原野の間深く埋伏せる富源、人或は之を知らざるのみ、亦

塞上の異俗漢蒙雜居し其生産物單一にあらす頗る注目す可きものあれば一々之を叙せん。

二四〇

遼河上流の富力が開發せらるゝ由來は如此而も將來益々有望有利なるを以て漢人の新移民は凡ての方面に利源を開發するに餘念なし先づ新墾の田を得て家居し第一に目睹したるものは彼の鬱蒼たる森林なり數百年來の老樹は頻りに伐り倒されて巨大の利益を博したるなり今や塞上の山亦多くは童顏裸體となるも往古森林樹木の多きは宋の王曾か古北口を過ぐるより長松鬱然たりとの實歴談及び元史に松州今赤峰縣の地は松林の南境に在りとの記事にても想像するを得亦明の嘉靖年間に胡守中邊外の諸山森林を伐採するもの頗る多きか爲に遼元以來の古樹略は盡くるに至りたりと云ふを見ても當時口外の林材に富めるを知る可し二十年來平泉に住める外國人の實見談を聴くに此邊一帶二十年後の今日迄に深林老樹の伐採せられたるもの夥たしと之れ明かに漢人來往の最初に於て深林は唯一の富源たるを説明するものなり。

現に尙ほ本蘭園場附近の諸山及建昌平泉等の山谷頗老樹の薪燬たるあり黃松白

松、檜、樺、柏、檜、榿、梓、樺、楊、柳の諸材は諸山に産す深谷多材の區住民木炭を焼くを業とし之を口内に鬻ぐ其質は内地に比すれば特に佳なるを以て其利亦少からず山林の利漸く薄ふして礦物の富益々世人に認めらる遼河上流將來最大一の富源たるは則ち此鑛山採掘となす此地方の蒙古人は游牧を業として漢人は耕種を業とし其智力を闘わして生存競争をなしつゝあるも蒙古人の蒙昧なる漢人の敵にあらざるは既に論する所の如し漢人固より蒙古人に優るの人種と雖も之を歐洲人我國人等に比すれば到底及さる處し故に彼等漢人此礦物饒多の郷に在りて之を開掘するの利を知らず多大の富は地下に埋伏せらるゝ茲に幾百千年惜む可き哉蒙古人より漢人より優等なる人種にして此地に移住せんか直ちに此利源に依りて富を吸收し其權力を増大にし蒙古人の權力を壓迫しつゝある漢人の上に立ちて之を支配し願使すること火を見るよりも明かなり何となれば人種の生存競争は最も道徳智識の發達して權力を有する一致團體の人種か必勝者たればなり例へば力を角するか如く吾人は同等の力量ある人と争ふより寧ろ力弱きものと争ふの安全にして必勝なるに若かず我國民の情弊に經營する之れに似たり殊に

二四一

塞上に事を爲す最も行ひ易しとなす我國民たるもの何そ去りて深河上流に移住し、昔て漢人が蒙古の下部民を利用して之れか富源を拓し、游牧の郷は進んで農業の地と化するの跡を追ひ、蒙古人漢人の己れに及ばざるを利用して、礦物の富を吸收し、農業地は再變して工業地と化し、遂に我國民の富利を殖し、權力を張らざるや、世界の進運は茫然として、蒙古の野西藏の谷にまで侵入せずんば止まざらんとす、見よ、瘴烟毒霧の郷、虬龍鱗魚の窟たる南阿の天、猶ほ且つ大英國の砲彈は破裂せしにあらずや、况んや直隸の藩屏たる口外、深河上流の地、其富源開かれずして止まん、其形勢の地、利用せられずして止まん、唯其富源の世人の多くに認識せられざるを以ての故に、人は言ふ口外無用の土と、嗚呼然るか、豈に其れ然らんや、過去と現在に於ては、山林と農業との富源に依頼して發達したるは之を叙して盡せり、將來に於ては、礦山の採掘こそ、唯一の富源として益々深河上流の發達を來す可き素因たらん、之れ社會の進歩に伴ふ發達なれば、予か敢て囑々する所以なり、

礦山の多くか深河沿を幹として點在すと聞く、熱河の金鐵最も名高く、平泉州の雅圖溝、楊樹溝、波羅樹等の産鉛頗る多量にして、康熙年間盛に採掘したる事ありしも、

雍正年間之を封閉せしむ、頃者張翼か採掘せんとする、熱河の石炭礦は頗る有望と號す、現に開礦せるもの多からずと雖も、平泉建昌朝陽等、金銀銅鐵の産地たりと云ふ、之を史に檢するに、

元史食貨志に、大寧、今平泉建昌赤峰等の地、金を産し、銅を産し、又硃砂水銀を産す、又曰く、金坑は遼陽に在るものは龍山縣、今平泉南境の湖碧峪にして、毎年課金三兩を納む、銀坑の遼陽に在るものは惠州、今平泉州北に在す、銀坑三十六あり、提舉司を立て、銀課を辨す、

元一統志に、興中州、今深平縣、利州、平泉州東南、惠州、其北、皆鐵冶あり、皆官課を辨す、龍山縣、興中州、皆瑪瑙場あり、每歲貢す、

明一統志に、三衛瑪瑙を産すとあり、

遼史地理志に、澤州、今平泉州境內、鍊陷河の銀冶を採る、

遼元の時に、金銀銅鐵を産し、瑪瑙を産したるの事實を以ても、今尙諸礦物に富めるを知る可し、其後礦政の弊に由りて、民自から之れか採掘を願かず、政府之を封閉せしむる等の事情より、礦脈盡きたるには、あらざれとも、廢棄すること、幾百年利源久

しく杜絶す、漸く、近來内外人の注目する所となり、斯業に従事するもの少からず、某國人の如きは盛に之れか探見と研究に従事しつゝあり、専門工學者の實歴せる言を聽くに亦其有望有利を説く、熱河の礦山が將來口外唯一の富源たるは明白なり。

口外の主人公たる蒙古人か唯一の財産たる者は牧畜となす、青草の野、山藪の隘、幽谷の険、群牲蕃滋し、異獸奇畜亦齒集す、其群畜の富は、高士奇をして、雲山絶好、塞垣圖、濃黛輕烟、曉暮殊、野外八屯分畜、牧馬牛千里富、青芻と查慎行をして、四時邊草、閑榮枯、填谷壅糞、作雪舖、一色羊群三百萬、不曾輕費大官芻と吟せしむ、欽定熱河志に、今豊寧の西即ち上都達布遜諾爾に接する牧場、馬最も蕃息す、其蒙古の諸部皆畜牧に習ひ、毎歲行園進宴の時、詐馬教馳の觀を陳す、牧事の盛古來未曾有と誇り、古北三廳志には、康熙年間、馬駝牛羊蕃息する約三百萬と註明す、牧畜の富の度は以て察知す可きなり。

馬羊牛の産最も多く、遼、里岡崖リウカンガの蒙馳、喀爾沁の驢、木蘭園場の鹿群の利亦鮮からず、其他野獸には山羊、青羊、虎豹、熊、狼、山獺、狐、貂、鼠、屬等、塞山に跳騰す、此等の毛皮は以て

裘となす可きより其需用極めて多く、年々之を口内に輸出し、常に塞上の一大富源となす、熱河市上最多の毛皮舖を見るは之れか爲なり、又羊毛駝毛は羅紗毛氈類の毛織物の原料として需用多く、此地方及び張家口外より輸出する羊毛駝毛は、北清より海外に輸出する品目中の大宗に屬す、之れ亦頗る注目す可きの價値あるものとす、口外地方の羊駝毛等毛類の産額多きを利用して毛織物工業を開始せんか其利益は莫大ならん。

熱河市上皮貨舖と比肩して盛大なる商店は賣藥舖なり、賣藥は亦灤河上流地方の特種なる利源なり、由來漢土の醫術は依然として舊套を守り、進歩改革の痕なく、傷寒論本草綱目は醫師の金管玉條なり、草根木皮は彼等か唯一の材料たる藥品なり、口外の地異草佳木多く、最も藥材に富むと號す、土人能く山野に入り、之を採掘するを暗知す、口外の商人は毎に之を買収して口内の商人に賣り渡すなり、豐寧の人參、獨石口外好來滿の黃耆、平泉の五味子、各山谷間の艾及蒿等、其名擧げて算ぶ可からず、殊に近來各縣到底の陸田に阿片を培養するもの夥し、之れ亦藥舖の買賣する品目にして其利益の多きより各戸之れか培養を務めつゝあり、阿片固より有害なる

支那人の嗜好物にして喫烟の類なり、此發淨物が培養せられつゝあるは嘔す可しと雖も、以て其販路の廣きを見る可し。

漢人に由りて盛に耕作せらるゝ農産物は年々其獲を多くし、民富を増加し、衣食の財源となす、産穀の重なるものは、粟黍稷大麥小麥高粱玉蜀黍豆類の雜穀にして、殊に此方人の日用常食とする蕎麥は山田に適するを以て多く産し、大豆類亦多く、蕎麥芝蔴とは共に關内に輸出するの産物なり、烟草藍麻木綿の如き必需品も盛に耕種せられつゝあり、其菜圃には白菜菘山韭蘿蔔瓜類盛に繁り、菓樹には栗栗桃杏核桃榛梨の美果を結び、梨樹略は梨花萬樹を以て名あり、富庶縣の故地は西瓜の饒多なる關内西瓜種の始めと稱し、各山谷に叢生する厥は土人の採取曝乾束して關内に鬻ぐの拾利たり、支那料理に珍重せらるゝ口蘑は則ち口外の産する蘑菇にして、榆耳は榆肉とも云へ、蘑菇に似て其味肥美肉の如し、俱に口外の産として桌上の珍なり。

農家の副産は惟り山谷のみに存せずして亦河中にも在りて存す、灤河及土河の流、數多の魚屬を産し、其利亦薄からず、灤河の鯉鯽尤も名高く、其味内地に優る萬々な

り、伊遜河の若漢鮮は鱸に似て味の美は之れに過ぐ、其他鮎、栢、綠魚、柳根、赤蟲子魚等の珍魚は諸河の中に産す。

熱河府の池子河に産する所の天然鹽は、煎熬を待たずして成り、蒙古人小車を用ひ載して貿易し、邊民皆天然の利に食するを得せしめて、鹽車の口内に入り來るを禁すと云ふを見は、其少量にあらざる知る可し。

口外人の製産物は多からずと雖も悔る可からず、建昌の山綢の如きは最も注目す可きの價值あり、是れ所謂樺櫨繭より得たる糸を織りたる絹織物にして、建昌の特産なり、樺櫨繭とは毎年内地の民蠶種を携ひて塞外に出で、樺櫨木の葉を用ひて蠶を養ひ得たる繭を云ふ、樺櫨樹は我國の柏木にて、其葉以て養蠶する者なれば、建昌綢とは則ち山蠶繭の織物なり、此織物盛に行わるゝを以て今承德府境の紅石嶺外に養蠶場ありて之れに倣ひ綢を出すに至るも、其質稍建昌に遜る、然りと雖も、斯業の經營其宜を得は、發達と利潤は大に擴張せらるゝこと必然なり。

之れに繼ひて木綿織物の業も將來益々有望ならん、其始め木綿は綿花として使用せられ、民織粧を知らざりしが、海忠の熱河知府たるより、民に紡績を教ひ之を奨励

するに及んで木綿織物を出すに至り、其品質に南方の織物に劣らずと、北清地方綿布の需用最多なるを以て、此事業の發達するは勿論なり、只經營の如何に在り、熱河の特産としては馬毛皮を以て作りたる美麗なる皮菌、樺、椴等の木細工及び蜜臘など最も販路多き輸出物なり、畜産の地なれば古來より乳酪は最も名物の産なり、

深河上流の地決して窮索不毛の郷にあらず、山谷に群獸の驅るあり、河沼に鮮魚の漁す可きあり、山林開けて田野廣く、五禾豐熟して草類實り、青草の豊群性繁殖して其毛皮及び毛類は商賈の巨利を博する所、金銀煤炭の利益は漸く識者の注目を牽き、優に諸工業殖産の業を起すに足り、多大なる富源は各處に埋没しあるは叙上の事實に徴して明白ならん、然るに従來天然の形勢と人智の蒙昧なるは、交通の不便に因りて天秘の富源を開發するに至らしめず、空しく山野の間に委積せらる、之れ寧ろ天の我國民に幸するにあらざるなきか、

我國民たるもの何すれぞ、進んで之れか研究と經營に心を用ひざるや、予は直隸の北境、蒙古の南部、滿州の西隣なる深河上流の富源が、我國民に由りて一日も速かに

開拓せられんことを望んで止まらざるなり、又我國の當局者に向ふて、此富源開拓の經營を渴望して已まざる所以のものは、單に我國の商工業を北清に擴張せんか爲のみならず、其以上の要求と希望を有するなり、我國が東亞の先進國として清韓境土の保全を護り、世界の表に雄飛する爲の必然の準備なればなり、

然らば如何にして此深河上流の富源開發に着手せんか、曰く深州の開市、曰く深河口築港、曰く東綏鐵道の敷設等、經營の實權を握り、進んで熱河鑛山採掘權を要求し之れが實行に従事すること是れなり、

清國には南船北馬の稱ありて、南方は水運に依頼し、北方は陸運に由りたるものなり、今北馬は易ふるに鐵道を以てせざる可からず、北清の人文の進歩を圖り、商工業の發達を促すは切に交通機關の完備に待たざる可からず、口外の利源を聞く一に鐵道の便に依るの外道なきなり、故に我國たるもの深州形勝の地に據りて東綏一帶商業の中心點となし、深河口に淀泊せし貨物は直ちに東綏鐵道に搭載して深州に達し、更らに進んで永平遷安を経て長城外に走り、平泉州に達して貨物を吞吐し、商工業の利權を握り、一面は沿道の盧龍遷安撫寧、平泉、熱河等、各州縣最も鐵物の淵

二五〇
茲と稱せらるゝ寶庫の開拓に力を奮ふて其富を吸収し、嘗て東鐵道敷設を論じたる七大支線の外、別に平泉より更に其線路を北上せしめて赤峰縣の地を經過し、土河流域を溯りて西遼河沿岸の巴林に達するの東蒙古鐵道の敷設を急かさる可からず、斯くして遼河口より一直線に直隸の東部を縦貫する鐵道は渤海灣より東蒙古に通し、更に直隸の北境を走る口外鐵道は、熱河以西より横行し來りて平泉州なる東鐵道本幹の終點に於て十字形の交叉點をなし、東行して建昌朝陽を過きて柵外に出て、盛京省の義州より斜に朝鮮の義州を睨み、滿州を横斷し、京義鐵道に結び、其端は京釜鐵道の釜山に達し、我國に接するを得、如此にして我國の北清に於ける勢力は増大し、商權は伸長せられ、我國の朝鮮に於ける事業と勢力との基礎は完固なるを得るは必然なり、然る後魯國の滿州經營何か懼れん、亦何か憚らん、彼國の經營は却て我國の利用する所となるに至らん、之れ所謂禍を轉して福となすものにあらずや、

然りと雖も、遼河の三大事業を完成し、北清に幾多の東鐵道の本支線を敷設して、悉く遼州に集注し、其一端を釜山に達せしめ、鞍山探掘權等の特權を得て、遼河上流

の富源を開發するに至る、蓋し容易の業にあらず、且つ緊急缺く可らざる台灣事業の繼續費を削除したる議會を有する我が國家、僅々二百哩の京釜鐵道未だに完成せざる我國民が、徒らに内治の黨争紛議に擾々として、日も足らず、毫も意を海外の經營に用ゐず、心を國勢の伸長に盡さず、敢て魯國の橫暴非禮を觀過するの已を得ざる状態に在る、今日に於て、如何に緊急なる海外經營を論ずるも、或は無用の業たらん時間と金錢を控除して、其成功を豫期したる予か主張の實行せらるゝは容易にあらずと信せざるにあらず、然れども、實行の前驅は主張なり、豫言なり、故に之を主張するものなれば、主張の容れられて國民の方針之れに嚮ひ、近き將來に實行せられんことを熱望するなり、何となれば、對魯問題解決の一大要義なればなり、魯國の滿州第二期撤兵の事起るや、其宣言を蹂躪して撤兵を敢行せず、荏苒して列國を欺罔し、朝鮮の西北境に兵力を集めて、頗る朝鮮に危害を加へつゝ、あり、我國の利權は侵害せられたりとの警報日夜に傳聞す、之れ明かに魯國の非理非禮にして、彼國が三國同盟して我國の遼島半島占領を非難して、東洋平和に害ありと爲し、我國をして之を還附せしむ、彼國猶ほ何の厚顔か、敢て遼東の野に蟠踞し、韓國北境を

壓迫するや、言質尙ほ我國人の耳朶に在り、今此不穩の舉動を目睹す、誰か憤怒激抗せざらん、噫然り、然りと雖も、内に顧みて國勢の如何を察すれば、所謂泣出て、吳に嫁すの状況に立たざる可からず、輕舉妄動固より希望ある國民の敢て爲さざる所忍ふ可からざるに忍はざる可からず、尺蠖の屈するは伸ひんか爲なり、能く伸ぶるか故に能く屈す、屈伸機に投すへし、機會は到る處に我國民を招くと雖も、今や時其時にあらず、其眼を開ひて其口を緘し、其手を動かさず、其足を早めんのみ、激動す可きの時にあらず、騷擾す可きの機にあらず、靜思慮、善く其謀を運らさん哉。

兵法に曰く、百戰百勝は善の善なるものにあらず、又曰く、善戰者は敵の謀を伐つと、是れ外交上に善用す可きの訓言にあらずや、魯國頻りに滿州の兵員を移動して列國の耳目を集め、進んで朝鮮の北境を壓し、我國に迫まるを擬す、而して彼國は暗に何物をか利せんとす、之れ何人も能く之を認識する所なり、此時我國起ちて器々彼國と相争はんと擬するは彼の誘ふ所となる、彼に誘はるゝは彼に謀られしなり、寧ろ彼を誘ひ、彼を釣り、彼の虚を衝き、彼の謀を伐つに若くはなし、彼國愈々騷かば我國愈々黙し、彼國兵を動かさば我國正義を持して動かす、清韓に勤めて魯國不當の

要求に應せざらしめ、魯國にして滿州に一尺の權を得ば、我國も英米を聯ねて共に各一尺の權を得へし、魯國にして得るあるの利權、我國得る能はざるの理無けん、互に對等の權利あり、此理義の正を固執して、泰然魯國に對して動かす、表面無爲を裝ひ、退いて清國政府の手を握り、東鐵道敷設、熱河等鐵山探掘權を得、而して後に灤州の開市、灤州の設備を清國に要求せん、我國の計畫既に成るに及ばず、奮然起つて灤河上流の經營に着手せん、魯國は顧みて懼然、一日も安眠を得る能はず、滿州の防備に急にして、韓國の經營を敢てするの暇なく、退ひて蒙古を窺ふは當然の順序なり、我國其虚に乗して、猛然力を韓の西北境に奮ふ可し、之れ敵の謀を伐ち、戦はずして人の兵を屈するにあらずや、對魯の策、蓋し之れより善なるは莫かるへし。

且つ灤河上流の地は四塞の郷、長城外要害の地にして、直隸全圖の北を蔽ひ、山海關、桃花口、冷口、喜峰口、潘家口、古北口、獨石口、白馬關等、無數の關門、直ちに畿輔に通し、西より北は興安山脈、蜿蜒として天を畫し、西遼河其北を流れ、東面一帶亦峻嶺雄峰、滿州の邊疆を爲して北走し、西北は輕騎漸く灤河上流に沿ふて、多倫諾爾の饒地に出で、別路獨石口を扼す可く、東北は盤河、潢河の二流に従ふて、勁兵朝に滿州に出でん

か夕に奉天遼陽に馳することを得仰ひて蒙古の動靜を貼ひ俯して直隸の司命を製す我國遼河より進んで塞上に踞し、瀋州廬龍の險に據り、深根固蒂滿州の後を窺へ、清韓兩面より魯國の動靜を觀察し、清韓境土の保全を保護し、商工業利權を發達することを得る亦快ならずや。

我國の人士、稍もすれば日露の開戦を絶叫す、國民も亦之れか爲には膏血を絞り、貨財を空ふするも顧みざらんとす、其敵愾心は愛す可く、其意氣は壯とす可し、然れども、一開戦を以て對魯問題は解決し盡せるにあらず、一快心の事を以て國家百年の大計を忘るゝか如きは、遠大なる希望ある我國民の敢て爲す可きの事に非ず、予は我國民か常に開戦せんとするの決心と覺悟とを以て、平和なる競争場裡に立ちて、經營を重んじ、毫も遺算なく、敢て魯國の後に立つことなきを望んで止まらざるなり、故に遼河上流の富源を論して言茲に及ぶ而已。(此一語明治三十六年六月、日本人より轉載す)

三 白河沿岸の一偉人

世人或は李鴻章か、天津の經營、太沽口の防備、鐵道の敷設等に因りて北清の戦術上、商業上に一新生面を開きたるの功は能く之を知るも、李氏か幕僚となり、補助者と

なり、之が成功に力を盡し、白河の沿岸に一異彩を放ちたる一偉人あるとは知らざらん、此の偉人を誰となす、太沽海口の西北三里餘に數丁方形の小城あり、新城と云ふ、其城門に鐫刻あり、曰く同治十二年周盛傳造之、則ち新城の築城者周盛傳其人なり。

周盛傳の名は周く世人に知られずと雖も、彼は決して湮没す可き人物にあらず、彼の歴史は數々廻轉し、彼の事業は單一にあらず、彼の才能は多方面に注がれたるを以て、初め武臣より身を起し、馳名を轟かしたる點よりすれば、雄將なり、夙に西洋の事情に明かにして、兵書に精通したるより云へば、卓識の士なり、砲術築城等に熟達せる點よりは、戦術家と謂ふ可く、白河沿岸に開港を行ひたる點よりは、經世家也、開拓者なり、其の總てか成功したるを見れば、周氏は研究家にあらずして、實行家なり、其成功も一步は一步より高く、着實に痕跡を止めたり。

(イ) 其前半世

髮逆の擾亂は支那四百餘州に波動し、殆んど將さに滿州朝廷の根柢を洗ひ去らんとせり、朝廷は此危機に蔽むて、許多の人物の必需を招きしより、舊來の法則も習慣

も顧るの暇なく、只管一時の危を救ふに急にして其出處も修養も閱歴も試験せず、破格に人物を登用したり、於是乎草莽の英雄巖穴の士は猛然として立てり、殊に曾國藩を中心として南方よりは人材輩出し、左宗棠、曾紀澤、羅澤南、胡林翼、曾國荃、李續賓、彭玉麟、李鴻章、張之洞等皆な此時に崛起したるなり、咸豐同治年間は清朝三百年間最も人物の笈生したるの時なりし、周盛傳も此の機運に乘じ、安徽合肥縣の人を以て李鴻章に陪して起り、淮軍に將となり、江南浙江地方を克復し、戦功最も多く、其後は湖北陝西に轉戦し、驍名あり、武將の魁傑と稱せらる、湖南提督に昇り、死後武壯公と諡するを以ても、彼の髮逆討剿の武功か少々にあらざるを知る可し、髮逆捻匪の大亂相次ぎ、英佛軍の北京に侵入するあり、内憂外患交々臻り、天下頗る疲弊し、瘡痍未だ癒えざるの時を以て、李鴻章は直隸總督として天津に入り、深く北清經營の急たるを感し、外侮内訌の頻到するは全く神京の藩屏防衛嚴ならず、以て清廷の威嚴を示すに足らずとなし、其重臣周盛傳に命じて、太沽砲台を増修し、新城を築造せしむ、時は同治十年となす、之れ彼か軍人且經世家たる過渡時代にして、彼か白河沿の專業は此時より胞出したるなり、

(ロ) 其過渡時代

新城の築造を命せられたるは彼か最も得意の技能を示すの時なれば、彼は奮然立ちて苦心焦慮、三年ならずして工竣るや、自から城門に彫すらく、周盛傳造之と、是れ彼か技能を天下に公白して憚らざる所なり、此の五字は彼か好箇の紀念なり、新城の地たる、北は白河の榮洄するあり、西南は小站を連ねて海に面し、太沽の後援たる可く、西は直ちに葛沽に通じ、其糧運を待ちて遠く天津に通ずる形勢にして、城郭には壕を廻らし、河渠を鑿し、道路橋梁兵營砲台等の配置も頗る精密に、嚴格に巧妙に、敵の攻撃を容易ならざらしめ、殊に大沽没落の事あらんか、一旦敗兵を收容して充分の抵抗を試み、優に天津の防備を完全ならしむる點に於ては殆んど遺憾なきもゝの如し、

此の形勝の地點に如此設備を爲し、其中心たる新城の築城は慎重になりたるものなり、余は戦術家にも建築家にもあらざれば、此の新城の如何なる點まで巧妙にして、戦路上如何なる成績を有するかまでは説明する能はざるも、大體に於て其規模こそ小なれ、防備の配置と築城の精密なるとは、支那從來の築造と西洋の新式とを

折衷調和して支那の戦術上に一異彩を放つ可き巧妙なる建築と云ふを得へしと信す。

三五八

周盛傳か苦心慘愴に成りたる築城も、庚子拳匪の亂聯合軍の砲火渤海に蔽き旌旗海口に翻る危機に蒞むて、羅光榮十營の兵に將として海口を扼するの任に當るも、一敗して此城亦守らず、空しく敵手に委す、其後和議成り此城亦た破壊せらるゝの悲運に遇ふて斷礫片石を止めず、國破れて空しく山河在り、城碎かれて草莽をたり、周氏の遺跡何處に尋ねん、噫、彼か心血を注きたる白河沿の一大紀念物夢の如くに溼沒せられたるなり。

聞説く彼れ築城の際に豫言して曰く、「此城能く三十年を保つ可し」と、今にして土人此言を想起し、去歲余に語りて曰く數へて三十年に迫ふ、周公は其神なりと、彼か豫言や豈土人の意の如くならん、豈に土人の意の如くならんや、若し周氏をして地下に起して現状を目睹せしめば、豫言の不祥に了るを悔ゆるならん。

去年北清駐屯軍司令長官たる、山根將軍は嘗て周氏か此の新城を築きつゝありし當時、北清地理視察の爲に來りしか、其守衛頗る嚴にして容易に其模様を知るに由

なく、大に苦心して後に一見するを得しとか、卅年の後將軍再び我が軍隊の此地に駐屯するを歴閲し來りて一宿せらる、時は恰も城壁破壊工事の始まる前なりき、其築く時壞れる時に來會せる將軍の感慨果して如何うや。

(ハ) 其後半世

天運と時局は廻轉す、俄然として暗雲湧き、疾風來り、閃電迅雷亦驟雨到り、山岳爲に一震す、天地の變茲に窮まり、而して後雲散し、天晴れ、氣澄み、風涼、月清、天地の和を見る、天下亦常和なく、常變なし、成豊の變極まりて同治中興の業成る、英俊の士盛名を抱ひて權要に立たされは、閑雲野鶴と侶して太平を歌ふ、天下滔々兵革を忘れんとす、翻つて内情を察すれば、政府は出來得る丈けの金櫃を傾け盡し、あらゆる無理算段をして民人の膏血を絞れり、故に財政の靡亂は極に達し、亦た億兆の民も、砲烟劍撃の下、掠奪強姦殺戮等、凡ての罪惡より救はれたる時は喜ひに血迷ひ心狂し、政府に感謝し、武臣を賞嘆したるも、時過き氣静まり、熱冷へたるに及ひては、食櫃は空しく、飢寒身に迫り、妻は殺され、子は途に迷ひ、親々離散の苦痛に愕然として泣かざる能はず、此の可憐なる窮民は日に酷吏に賣めらる、豈に恩怨一朝に豹變せざらんや。

二五九

周氏は此の上は財政に苦み下は窮に泣く時に苦寒の郷白河の沿に移住し來り、前後半世の過渡時代を経て身世一轉し、後半世の歴史を展開せるなり、此の上下交困、悲罷せる現狀に刺撃せられたる彼か希望は果して如何、將た亦た何等の事業を策せんとするか、其蹟に付ひて説かん。

吾人か一度清國に渡航し、太沽に上陸し、陸路天津に向はんとすれば、西沽の北にて萬年橋を渡り、一水の直線に西北より來るに沿ふて新城に到るなる可し、此河是唐官屯より南運河の水を引ひて白河口に入る、鹹河にして周盛傳か開墾せる所なり、又た沿途の原野に於て嘉禾の秀てたる水田を見るも、新城と白塘口とのみ、其他は悉く高粱黍粟の陸田なり、新城は周盛傳か開拓せし所、白塘口は明末の汪應岐か墾せし所なり。

古へ職方氏に、幽州穀宜三種、賈疏に云、黍稷稻と、幽州は今の順天保定永平天津の一帯なり、職方氏に稻に宜しと説くより以來、星移り物換り、幾百千年果して稻ありしや否を知らず、其後宋の王安水利の論を爲すより、元明の間、虞集脱克脱秦敷鄭岳徐貞明、張國産等、盛に西北水利を興さは良田を得るを説く、清廷に迫りて康熙雍正

年間政府より民間より之か實行を試みるもの少からず、然るに多くは失敗に了りたるも、近年尙ほ説を爲すもの多く、林則徐の如きは歴代諸家の論を輯めて西北水利篇を著し、開墾の有望なる事を説き、馮桂芬之れに和し、繼ひて震湯等盛に之を主張する等、之を古今の識者に聞く事熟せり、然れども獨り汪應岐か衆論を排し、萬難を凌きて之れか成果を擧げ、周盛傳か獨力經營し、其實功を示して其有望有利を説明するの劃切なるを聞かざるなり。

周盛傳か築城の命を受けて來りたる蘆家嘴の新城は、平蕪の曠野寥落たる人家、一二戸の部落に過ぎざりし、此落莫の郷鹽鹵の地に無趣味なる生活を爲す常人の難しとする所、況んや盛名を負ふて福利に飽くを得るの勳臣に於てをや、然るに彼は平然として關せざるもの、如く、權要の地に立たんとはせず、功名を博せんとはせず、去りとして間日月を樂まんとする仙士を學ひもせず、職分のある所に職を盡して其樂を樂まんとす。

當時窮民の狀を看取したる彼は惻然として仁愛の情に動かされ、鹽鹵磽瘠の地と雖も汪應岐か三百年前に西數里の地に許多の新田を開墾せるを見れば、此郷亦良

田を得る難からさらんとなし、其跡に倣ひて、新城一帯より遠く静海地方までの地勢高卑を度り、河渠を鑿し、殊に鹽鹵を涸れされは良田を得る難しとなし、唐官屯より南運河則衛河の甘水を引ひて東行小站新城を灌漑し、西沽の北白河の入る數百清里の大渠を通し、堰堰を建て、水を滴漏に便ならしめ、更に其水を縦横に溝して分ち、之に堤し、之に橋し、道を開き、或は牛馬器械を購ふて之を貸し、或は水車を備へ家屋を造り、兵を率ひて自から荒土を拓き、民を導きては草地を墾するなど、經營十餘年、滄海不毛の地は變じて良田と化す、新城小站一帯十二萬三千餘畝を開ひて嘉穀油々青波瀾漫の郷と爲し、鹽漁の民をして農を知り、深く其利に浴せしむるに至れり、肅條たる一寒村の新城は周氏か光榮とする第二の故郷なり、彼は今より廿年前に此土に逝去せり、其後新城は人口二千七百の小市街となり、市中に巍然として高莊なる大厦あり、周武壯公の祠と曰ふ、無數の扁額之か功德を頌す、是周盛傳を祭るの祠なり、小站等の地方亦地方不似合の高大なる公の祠を祭れり、以て公の盛徳民に侵漸するの如何に深きかを見る可し、

其著書は操陣圖、西法變式等あり、印行す、

周武莊公の前半世の勇名勳功多なりと雖も、彭公羅公塔公江公を逸過する能はず、得意の技能は新城の建築に由りて發揮せられたるも、戦争なる惡魔は之を破砕して顧みず、公の心血空しく芳草に遺す、従つて之を史上に闕すれば、公か名或は甚た彰明ならざらん、獨り後半世間に於ける開墾事業の功果は唯に白河沿の人民のみならず、北清の文明史上に抹殺す可からすと云ふ可し、世或は公を忘るゝあるも、十三萬頃の新開地は戦争に由りても破壊せらるゝ事なかる可し、嗚呼公の祠は白河の流の涸るゝまでは血食するなる可し、

吾人は罪禍多き戦争に於て盛名を博するよりは、未發の利源を開き天國の福祿を罪なき民に分與する無名の人物を敬仰する久矣、天下の重望を負ふて天下の要路に立つ丈夫の欲する所なりと雖も、落莫の野に己の志を高し名を無にし、事業を擧げて民人と其樂を俱にする、亦男子の願にあらずや、其の美華に酔はんよりは佳實を採らん哉、周氏に於て之を見る、嗚呼白河沿岸の一偉人！

北清大觀大尾

明治三十六年十二月十二日印刷
明治三十六年十二月十五日發行

定價六十錢

著作者

東京市牛込區南山伏町九番地
小川運平

發行者

東京市芝區金杉濱町四十九番地
伊藤俊三

印刷者

東京市淺草區黑舟町二十八番地
池田宗平

發行所

東京市牛込區南山伏町九番地
興亞書院

印刷所

東京市淺草區黑舟町二十八番地
東京並木活版所

賣

捌

所

東京市日本橋區通三丁目

丸善株式會社

東京市神田區表神保町

東京堂

東京市神田區一ツ橋通り

有斐閣

大阪市備後町

吉岡商店

賣

東京市日本橋區通三丁目

丸善株式會社

東京市神田區表神保町

東京堂

東京市神田區一ツ橋通り

有斐閣

大阪市備後町

吉岡商店

捌

所

小川柳波著

日本人と支那人

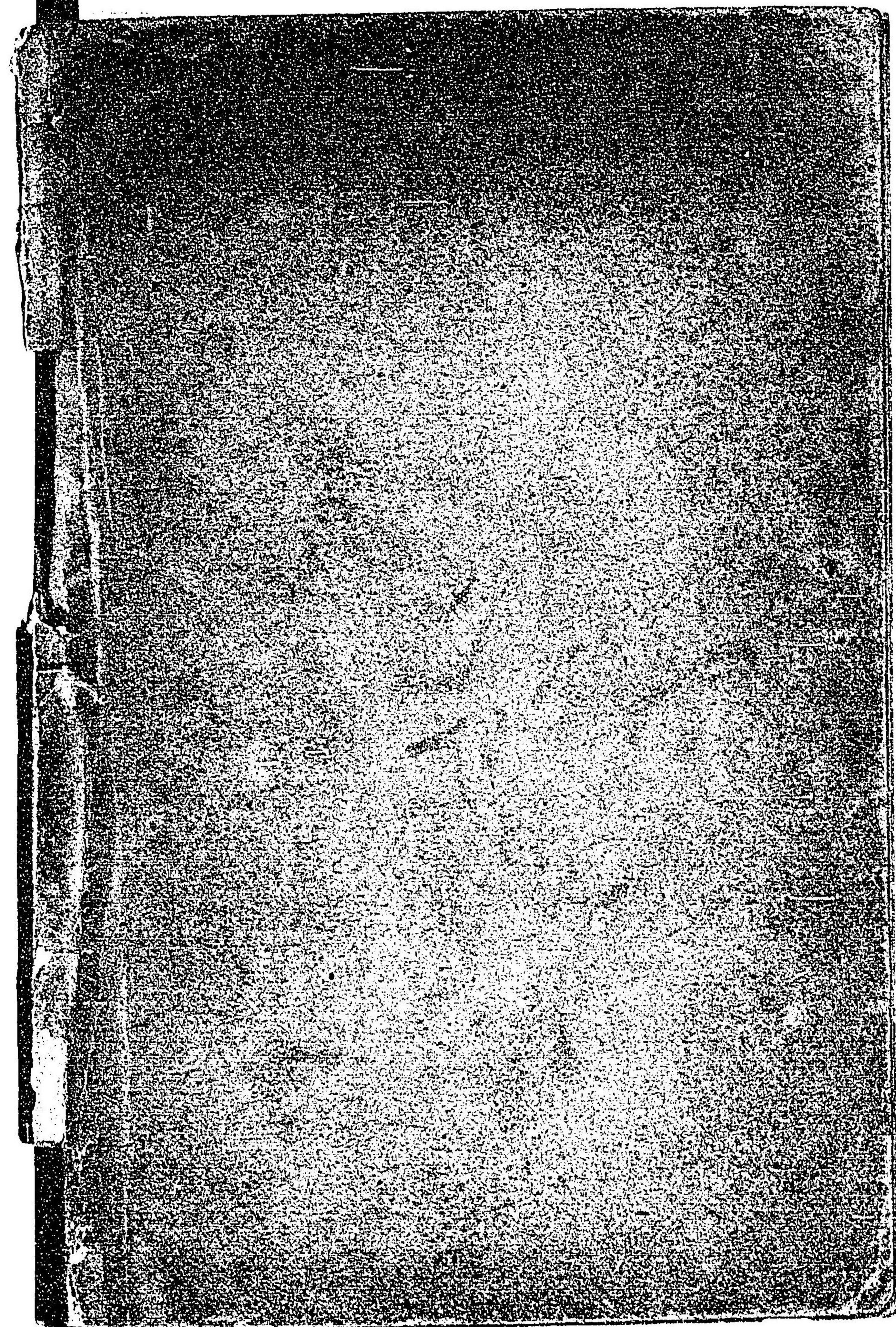
來春出版

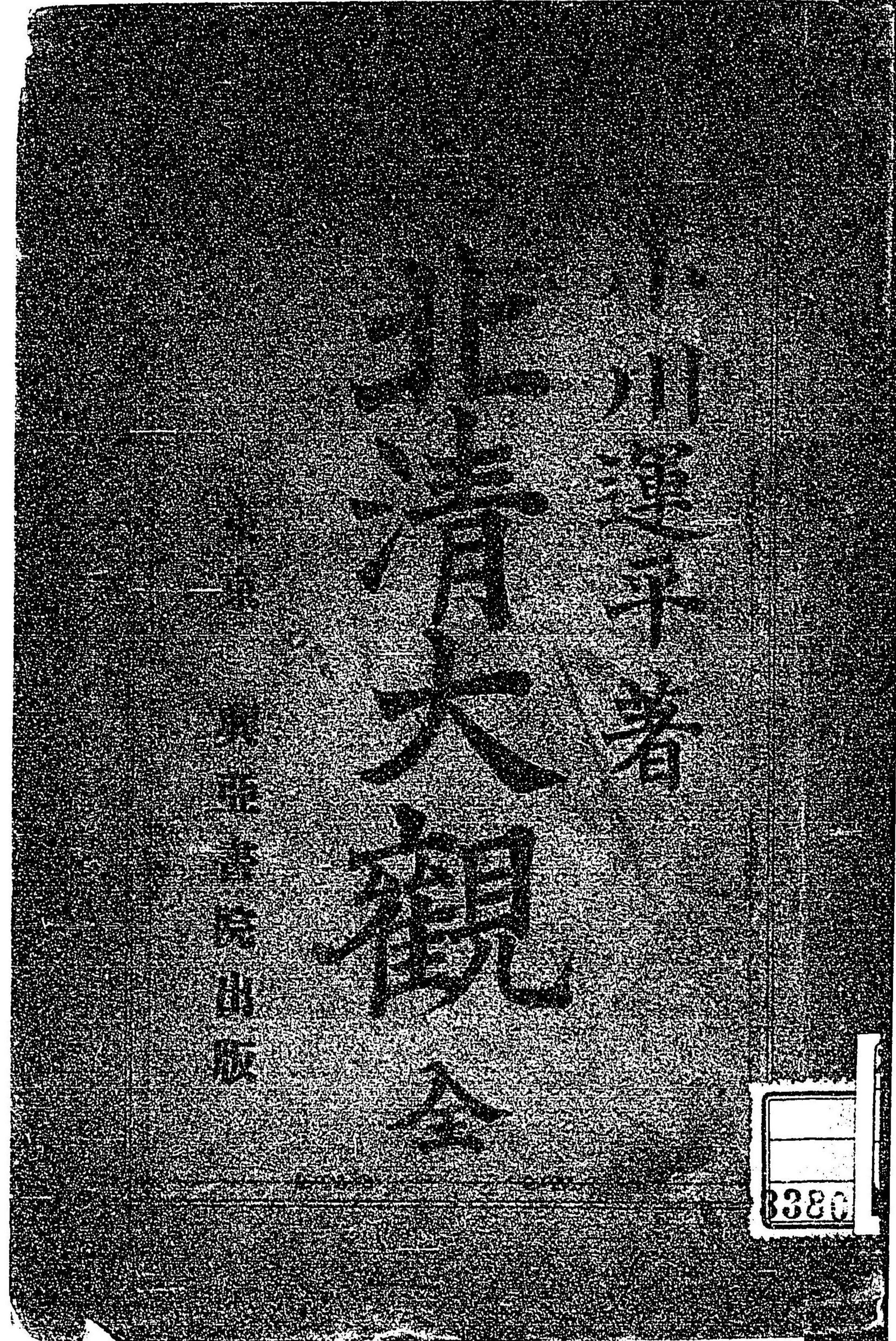
本書は叙序的に支那研究をなさんと欲し先づ支那の國土に生活せる主人公たる支那人を拉し來り、其家庭風俗人情より、政治文學の思想、嗜好性癖の微に至るまで、縱横論破し、殊に彼等の政治思想を説明せるが如き、彼等が畏る可きや否やを論斷せるが如きは、舊來漢學思想に浸されし儒流の悚心駭目する所にして、頗る注目す可きの價値あらん、而も此書が實地の見聞を経となし、自己特得の識見を緯となして、支那人なるものを實在に浮現せしめんとしたるものなれば、苟も支那に事業をなさんとする我國民には、彼れを知れ已れを知るの最も有益なる著書なり、又如何なる事業が彼我兩國民の利益なるかまでも論及せるものなれば、單に日本人と支那人とを對比論斷せるものと速斷せず、幸に一書を購入して其眞價を知れ、

興亞書院

GANNAN DO SHOTEN
KANDA
店書堂南蔵

NO
Y 300





026668-000-8

292.21-0283h

北清大観

小川 運平/著

M36

ADD-0358



0380